酪農学園の創立
黒澤西蔵と建学の精神

RAKUNO GAKUEN UNIVERSITY
酪農学園大学

［酪農学園大学公式サイト］

「建学原論」テキスト

酪農学園の創立

黒澤西蔵と建学の精神

題字：原　田　　勇

一方通行

「狭き門」

マタイによる福音書／７章　13～14節

「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。」

＝はじめに＝

創立者黒澤酉蔵の九七年の生涯において、酪農学園の前身の北海道酪農義塾を創設した昭和八年（一九三三）には四五歳、酪農学園大学が開学されたのは七五歳のときです。しかし、本学が建学の理念として掲げる「健土健民」「三愛主義」「実学」は、一朝一夕にできた思想に基づくものではありません。どのような意味がこめられているか、それらを理解するには、明治以降に起こった様々な社会変化の中で人がどのように生きたかという背景とともに学ぶことが肝要です。そこで、建学原論理解編では、次のような二部構成とします。

第Ⅰ部では、黒澤酉蔵が茨城県に生まれ、北海道で牛飼いとして進んでいく個人史を柱とします。酉蔵が働くということには、黒澤家の再興という母との約束があり、生活を安定させて家族を守るという目的がありました。しかし、いろいろな出会いで人生が大きく転換していき、働くという行為はその目的にはとどまらず、北海道を理想の農業国にするという社会的な目標をもったものに変わっていきます。その目標に向う信念と行動力が若き日々から培われてきた様子を見い出していきましょう。

第Ⅱ部では、酉蔵をはじめとする酪農学園の創立に関わった人々が、大正・昭和の激動の時代に、大きな目標に向って共に働き、多くの人に支えられ、社会に貢献していく実践の歩みを辿ります。酉蔵の信念が酪農学園の建学の精神として結実していきます。

建学原論は、理解編に続いて、現状編、継承編と展開されます。建学の理念は、現在そして未来に向けても非常に重要で普遍的なミッションであることが示されます。

目次

第Ⅰ部　社会変化と黒澤酉蔵の個人史　～「建学精神」の原点～

1章　知行合一（実学の原点）……4

2章　足尾銅山鉱毒事件と田中正造（健土健民の原点）……8

3章　北海道酪農への道……19

4章　デンマーク復興とグルントヴィ精神（三愛主義の原点）……28

第Ⅱ部　社会に貢献する創立者たちの実践の歩み

5章　酪農協同事業の船出……35

6章　農民教育事業の船出……41

7章　酪農学園大学への道……51

なぜ建学原論か？……建学原論企画担当……58

付一　酪農学園の建学の精神……黒澤　酉蔵（一九七〇年）……62

付二　酪農学園の建学精神　三愛主義とは何か……黒澤　酉蔵（一九六九年）……69

1 知行合一（実学の原点）

生い立ち

黒澤酉蔵は明治一八年（一八八五）三月二八日茨城県久慈郡世矢村字小目（現在の常陸太田市。水戸市の北方約二〇キロ）に生を得た。生家は五〇アールほどの田畑を持つ貧農であった。父は元之助、母はイノ。姉きく、妹とめ乃、弟和雄の四人兄弟の長男である。

父の元之助は隣村（額田村）の草野伝右衛門の長男に生まれたが没落したため、黒澤家に婿養子となった。元之助は大酒が災いして財を失い、その日の糧にも窮するように落ちぶれた。

母イノは子供たちに、草野家と黒澤家は共に財産家であったこと、また家運について何度も語り、黒澤家復興のために行商をしながらも家の再興を願い働いた。母は、子供たちに限りのない愛情を注ぎ、立派に養育した。

酉蔵は幼いながらも母の熱望に応えるためにも家運を挽回して元の黒澤家にしなければという強い決心があった。父も祖父も酒で財産をなくした教訓から、母の「お前だけは大酒飲みにはならないように」の戒めを守り、酉蔵は終生禁酒を貫いた。

酉蔵は数え年一一歳の春に尋常小学四年を卒業し、その後、隣家の漢学者

▶「酉和館」
酉蔵の生家は「酉和館」として集会所に使われている。「酉和館」の名は酉蔵と弟の和雄の名前からつけられた。常陸太田市には「黒澤先生生誕の地」の碑が建てられている。

磯野壇という老人に「日本外史」「十八史略」等を習い、近村に涯水義塾という漢学塾ができたので、漢文の外に数学・地理・歴史等を習った。

生地の近くには、水戸光圀公の隠居所である西山荘があった。水戸学の本拠地であり、村の人間は上下のわけへだてなく、誇りをもち、天下国家を論ずる気風があった。このような環境から酉蔵は、「知行合一（ちこうごういつ）―知識と行いは一致しなければならない―」の精神を身に付けた。

立志上京

酉蔵は成長するにつれ東京へ出て勉強したいと考えるようになった。貧しい水呑百姓であるので父親は絶対反対であったが、母親は「どんな苦労や困難にも耐え抜く覚悟があれば行ってよい」ときっぱりした態度で上京を許した。

酉蔵は、しっかりした聡明な母にいつも感謝し心の底から尊敬した。

酉蔵は数え年一五歳、明治三二年（一八九九）六月に上京した。東京で同郷の先輩黒澤茂が教師をしていたのでその宿に落ち着き、茂の紹介で神田区中猿楽町（現千代田区神田神保町）にある東京数学院（現東京高等学校）の小使い兼給仕として住み込んだ。毎日毎日何十というランプを掃除しなければならず、「これくらい嫌な仕事はなかった」と酉蔵は当時を回想している。一年後に数学院の先生である松本小七郎の書生にしてもらい、明治三三年（一九〇〇）四月から神田の正則英語学校に通学することができた。当時、海軍兵学校への入学も試みるが、体が小さいために体格検査で落とされると

▶「黒澤先生生誕の地」の碑

▶「西山荘」
水戸藩2代藩主徳川光圀の隠居所、国の指定史跡・名勝

いう体験をした。

人生の転換

田中正造が足尾銅山鉱毒事件を明治天皇に直訴する事件が起きたのは明治三四年（一九〇一）、酉蔵が数え年一七歳の時である。事件直後に田中正造を訪ね、即日師事した。そして、明治三八年、酉蔵は北海道に渡り、牛飼いの宇都宮仙太郎（後に「日本酪農の父」と称される）と出会って酪農を学び、四年後の明治四二年には酪農自営を果たした。しかし、その後の時代の流れに伴った著しい社会変化の中では、自営に専念する状況に留まることはなかった。酉蔵は、行動の人と言われ、知行合一の教えを実践した。

【資　料】

水戸学

水戸学は常陸国水戸藩（現在の茨城県北部）で形成された日本古来の伝統を追及する学問である。徳川光圀（一六二八～一七〇一）が水戸藩主となって学問に目覚め、中国の儒教に傾倒し、儒教・国学・神道を合わせた水戸学の基礎を築き「大日本史」を編集した。

酉蔵短歌

（「三愛の歌」一九七七年より）

・吾が母は
行商までも働きて
貧しき家計ささえ給えり

・小目の里
吾がなつかしき古里ぞ
西山荘に程近き村

・吾が古里
誇りとするは西山荘
国の基礎勤倹にあり

・田翁の教を生かし
蝦夷地にて
酪農の基築きたる我

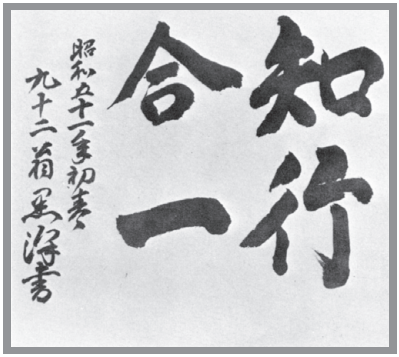
・田、宇の両翁に
まみえしは
我生涯のめぐみなりしぞ

儒教の教え―朱子学と陽明学―

孔子がとなえた儒教は「おのれを修め人を治める」（修己治人）を目標にした実践的な教えであったが、前漢時代（紀元前二〇六～二〇八）に国教化された後は無味乾燥なものになってしまった。これを是正しようと、宋の時代（九六〇～一二七九）に朱熹（しゅき）によって朱子学がおこり、明の時代（一三六八～一六四四）になって教えは「人間社会のすべては、権威に従い永久不変でかえられないもの」となり、朱子学の解釈を否定することはやってはならないものになった。朱子学に疑念を抱いた王陽明は儒教の根本経典である『大学』が朱熹により変えられていることに反発し、古典本来のすがたに戻した『古本（こほん）大学』（一五一八）を出版した。その教えは「権威にやみくもにしたがうのではなく、自ら責任をもって行動する心の自由」を説くものであった。

また儒教の「先ず其の言を行い、而してこれに従う」について、朱熹は万物の理を極めてから実践に向かうとする「知先行後」と解釈していたが、王陽明は、知って行わないのは、未だ知らないことと同じであると主張し、実践重視の教えとして「知行合一」を説いた。

日本では、江戸時代に中江藤樹（一六〇八～一六四八、近江聖人と呼ばれる）が陽明学を学び、後世に伝えた。



▶酉蔵の人生哲学「知行合一」

足尾銅山鉱毒事件と田中正造（健土健民の原点）

殖産興業政策としての足尾銅山

足尾銅山は、慶長一五年（一六一〇）、備前出身の二人の農民によって発見され、江戸幕府直轄として銅の採掘が始められた。明治九年（一八七六）、大実業家で政治家にも人脈の厚い古河市兵衛に採掘権が移り、新たな大鉱脈を発見することによって産銅量は飛躍的に伸び、別子（愛媛県）、小坂（秋田県）をしのぐ鉱山として活況を呈した。

当時の銅は、生糸に次ぐ重要な外貨獲得の産業であったので、明治政府にとっては富国強兵・殖産興業政策の要諦であった。本格的に掘り始めた明治一〇年（一八七七）から閉山の昭和四八年（一九七三）までの約一〇〇年間に掘られた坑道の長さは一二〇〇キロ、東京から博多までの距離にも匹敵したと言われている。

銅の生産には製錬用の燃料や坑道の支柱など大量の木材を必要としたため、周辺の国有林が伐採された。加えて、製錬所から排出されるヒ素や亜硫酸ガスによって、広範囲にわたり森林が破壊された。森林の枯死の広がりは、山々の表土を流亡させ、岩盤をむき出しにした。風雨によって一層土砂が崩壊し、落石は製錬所下方の集落を襲い地獄の谷と化した。

▶足尾銅山　明治・大正時代展示場

森林の破壊によって山は保水力を失い、雨水は一気に渡良瀬川を氾濫させることになった。度重なる洪水は、製錬後の廃石や鉱滓（泥砂）を多量に流し出し、その鉱毒は渡良瀬川流域の田畑を汚染し、川の生物や沿岸の植物を死に追いやり、住民の健康も損なわれていった。ただならぬ事態に気付き出した流域の人々は、帝国大学農科大学助教授古在由直に調査の依頼をした。その結果、足尾銅山から流れ出た鉱毒が原因であることが明らかになった。

田中正造と天皇への直訴事件

田中正造は天保一二年（一八四一）、下野国阿蘇郡小中村（現在の栃木県佐野市小中町）に名主の子として生まれ、数え年一九歳で名主に選ばれた。以来、「予は下野の百姓なり」を信条とし、農業へのこだわりを誇りとした。

明治二二年（一八八九）に大日本帝国憲法が発布され、翌年、正造が五〇歳のときに第一回総選挙が実施されて衆議院議員に当選した。明治二四年の帝国議会において、「足尾銅山鉱毒の儀につき質問書」を提出し、以来その生涯を閉じるまで、鉱害から農民・国土を守る闘いに身を投じた。

正造は鉱毒問題を掲げて農民救済のために身命をなげうって奔走した。国会でも何度も論陣を張り、政府の無為無策を論難し、被害民救済・銅山閉山等を訴えた。その間も渡良瀬川では大水害が頻発し、その惨害は銅山の鉱毒を伴うために深刻を極めた。救済を求める農民とそれを阻止する警察とが衝突し、暴民化に対して警察は弾圧を強化し、流血の惨事となる事件もあった。

▶足尾銅山鉱毒の研究「農学会会報」第一六号、一八九二年（写真提供、東京大学名誉教授熊澤喜久雄氏）

▶古在由直（一八六四～一九三四）

万策尽きて正造は明治三四年（一九〇一）一〇月二三日に代議士の職を辞し、一二月一〇日に、常用の木綿の紋付羽織袴に威儀を正し、第一六議会の開院式帰還途上の明治天皇に「謹奏」と上書きした訴状を捧げ、「お願いがございます」と大声を叫び群衆の中から駆け出した。正造は警官に押さえられ、天皇は通り過ぎ、直訴は失敗に終わったが、正造の直訴は天下の耳目を驚かした。

正造が推敲を重ねた直訴状のあらましは、

「…立派な天皇のすぐ近くで、数十万の国民が泣いているのは、政府が責任を果たしていないためだ。どうか政府に命じて、水源をきれいにし、川を元のように直し、毒土を除き、沿岸の産業を生き返らせ、衰えた町村を回復させ、鉱業を止め毒を止めるのに力を尽くさせてください…この命がけの申し出をお聞き入れくださいますように…」というものだった。

田中正造との対面

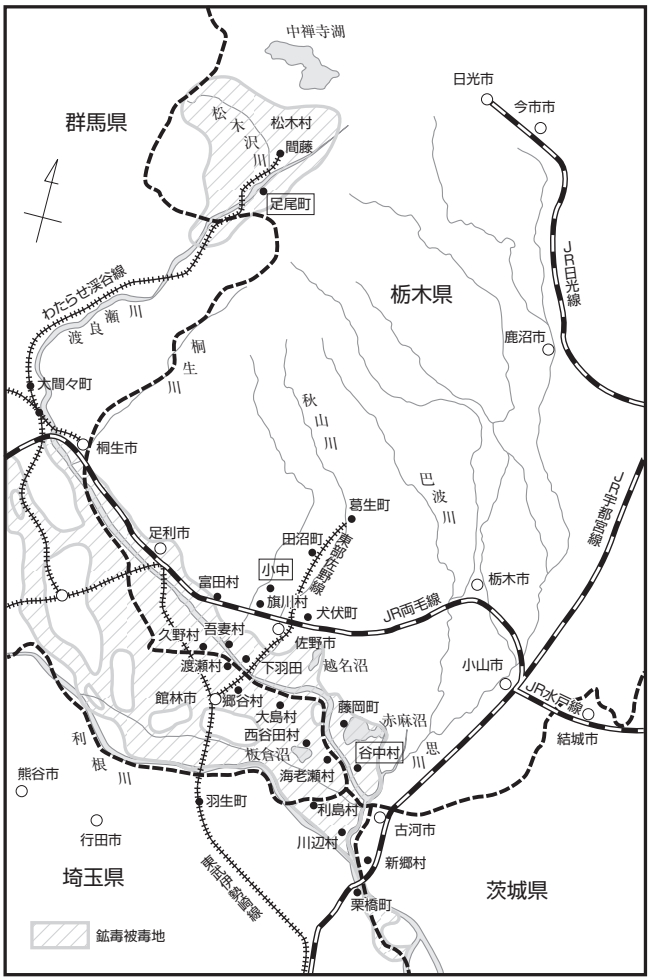
当時一七歳の黒澤酉蔵は、正造の決死の行動に全身の血が沸き返り煮えくり立ち、どうしてもじっとしてはいられない衝動にかられた。貧しさからのみじめな農村の生活は子供の時から身にしみて忘れることのできない心の痛みであったので、矢も盾もたまらぬ気持で、単身、東京市芝口二丁目（現在の東京都港区新橋）、行商人が定宿にしている三等旅館「越中屋」に正造を訪ねた。酉蔵は気魄あふれる大政治家を想像していたが、正造は「ヤァ、よく来ましたね。どうぞお上がりください」と酉蔵を招き入れた。

▶裸地化した足尾の山
現在柵工等による緑化工事が進められている。

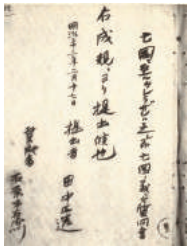
▶田中正造
（一八四一～一九一三）
写真は晩年のもの

正造の物腰、言葉は優しく、礼儀正しく、どことなく人を惹きつける人柄であった。足尾銅山鉱毒事件の真相や経緯等について、理路整然と説かれ、正義感と切々たる人間愛に満ちた人格にうたれ、酉蔵は、この人とならば一緒に命を投げ棄ててもよいと思いどんな苦労をしても虐げられた農民を救わなければならないと決意を固めた。

足尾鉱毒事件関係略図



（この地図は、明治30年ごろの地図に現在のおもな鉄道路線を加えたものです。）



▶明治三三年田中正造が提出した政府に対する質問書
亡国を至るに知らざれば
これ即ち亡国

足尾銅山鉱毒事件との闘い

明治三四年（一九〇一）一二月二七日に、西蔵は内村鑑三団長の率いる足尾銅山鉱毒災害地学生視察団に加わった。これには、東京の学生など一五〇〇～一六〇〇名が参加していた。更に、単身上流の村々をさかのぼり視察したが、聞きしにまさる惨害であった。東京では学生鉱毒救済会がつくられ連日路傍で演説会を開き、義援金品を集め、被害地へ送っていた。しかし、文部省当局は学生の救済運動を好まず、政治運動との理由から禁止命令を出したため、この運動は半年で影をひそめた。

西蔵はひるまず数名の同士とともに街頭に立って「難民を救え」を叫び義援金品を集め、被災者に送った。西蔵は、銅山主の資本家は横暴で政府は弱腰であるのに、農民は意気地がなく他力に頼るばかりで、自主、独自、自力で解決しようとする信念も気魄もないことを重く受け止めた。そして農民には自主的な目覚めによる強固な団結と行動が必要であると考えるようになっていった。明治三五年（一九〇二）一月に村々を回って同士を集め「青年行動隊」を組織し、集会や路上での演説会を行い、中央から名士を招き地元有志と懇談会を開き、革新的中堅青年と手を結んだのである。

投獄と聖書

「青年行動隊」の結成をもくろむ黒澤西蔵の行動に対し、警察は危険人物とみなしてつきまとうようになった。被害民救済をめぐる世論が「療原（りょうげん）の火」

▶潮田千勢子（一八四五～一九〇三）

一八八六年東京婦人矯風会設立に参与。廃娼運動や女子授産場の開設など社会事業に尽くす。全国組織としての日本基督教婦人矯風会の創立（一八九三年）以来約一〇年間副会頭、後に会頭を務める。一九〇一年、「鉱毒地救済婦人会」を組織し、救済活動に没頭した。その影響は、学生層に及び仏教団体の活動を促進した。一九〇三年、胃癌のため病没。

のように広がっていた時だけに、当局は極端に警戒したのだ。明治三五年（一九〇二）三月五日、西蔵は群馬県館林で逮捕され、前橋監獄に放り込まれた。容疑は「家宅侵入罪」であった。「反対運動よりも示談が得策だ」とする農民を説得するために、家に上がり込んだ時に捕えられたのだ。六カ月間の未決拘留の末、無罪の判決が下された。

獄中の試練の中で、鉱毒地救済婦人会会長の潮田千勢子（うしおだちせこ）より聖書の差し入れがあった。監獄生活での聖書との出合いは、西蔵の生涯を貫く行動規範になった。また、出獄後、たびたび正造は西蔵を伴って、新井奥邃（あらいおうすい）の教えを受けるため東京巣鴨の私塾「謙和舎」を訪れた。正造は、西蔵の果敢な行動に対し、西蔵青年の将来を案じ「学校に戻って正式な勉強をした方がよい」とアドバイスをした。

田中正造の配意で黒澤西蔵京北中学へ

正造は「黒澤君には将来のために正式に学校に入って勉強してもらわねばならぬ」として、苦しい生活の中から、毎月一〇円（現在の六万～八万円位）の学費を西蔵に送ることを約束した。明治三六年（一九〇三）、東京の京北中学に学ぶことが許された。西蔵にとって「手を合わせて拝む」ほどの感謝の思いであった。これに報いるかのように昭和三二年（一九五七）、私財をなげうって苦学青年のための「酪農育英資金」を創設した。後になってこの学費は、正造が人を介して栃木県の篤志家蓼沼丈吉（たでぬまじょうきち）にお願いしたものであったこと

新井奥邃
（一八四六～一九二三）

一八九九年に、二八年間余り米国における教団生活ののちに帰国し、一九〇三年に巣鴨に私塾「謙和舎」を開く。門人の感化・育成・啓発と無償で頒布した小冊子の執筆などを行い、清貧の生活を送る。一切の写真や肖像画を許さなかった。田中正造が足尾銅山操業停止と鉱毒被害民救済を訴え続けていたことから二人の交流が始まり、正造が死ぬまで続いた。

▶京北中学時代の西蔵（二〇歳）
明治三八年（一九〇五）三月

を知る。正造は、丈吉に、「同人（酉蔵）の精神は、正造の遠く及ばざる点多く、気力また及ばざる点多し、…非常に堅固謙遜の人に候…」との書状を送っている。この書状が見つかったのは、昭和三六年（一九六一）になってからだった。酉蔵は、あらためて感謝し涙した。

明治三八年（一九〇五）、正造の深い恩義に感謝しつつ無事学業を終えた酉蔵は、「人生を如何に生きるか」、「社会運動もいいが生活の安定なくして何もできない」、「母に孝行し弟妹を養う責任がある」などと思い悩む。

同年三月、酉蔵のもとに「ハハ　キトク　スグカエレ」の電報が届く。母イノが急逝し大きなショックを受けるが、母に代わって弟妹を養育する責任を感じ、「更始一新、新規蒔直し」の思いで、北海道行きを決意する。

田中正造の信念を回顧する

黒澤酉蔵は昭和二六年（一九五一）一〇月、六七歳の時に半世紀ぶりに思い出多い鉱毒地を訪れ、「田中正造記念会」を設立し、佐野市春日岡にある惣宗寺境内の田中翁墓前で報告祭を行った。その中で、正造を「凡人の及ばぬ偉人であった」と評し、正造と島田三郎代議士との論戦を思いおこし語った。正造は「国家の本は国土である。国土を尊ぶべく愛すべく、培わねばならない。従って国土の上に行われる農業は国の本である。まことに富国強兵に忠なるあまり、足尾銅山のようなものまで国の本であるかのように錯覚し、害毒が国土を侵し、人命を脅かしているにもかかわらず、国は奨励し、ある

酉蔵短歌

・鉱毒の民
救わんと獄に
六月を過ごし大きく育つ

・鉱毒の民
救わんと田翁と
東奔西走若き日の我

・吾が母は
無学なりしも人の道
よく心得て子等を教えし

・母の死は
我が蝦夷地に行く決意
酪農入りはかしこかりけり

いは援助していることは本末転倒もはなはだしい」と語り、銅山の即時閉鎖を主張した。島田は「それは原則論だ。銅山はわが国にとって重要な産業だから廃止することは出来ない。鉱毒の防止に最善を尽くすが農民には少し我慢してもらう」と主張した。

酉蔵は、「数十年酪農に取り組んできた経験と、世界各国の歴史と実情を見るとどの国も農業を重視し、これを基本に商工業の繁栄発達を期している。これらの世界の大勢から見ても今は正造の所論が正しかったと思っている」と回想している。

酉蔵の健土健民思想の原点は、正造の「国土を尊ぶべく愛すべく、培わねばならない。従って国土の上に行われる農業は国の本である」にあったことを伺い知ることができる。

また、酉蔵は正造のことを「恒久平和主義者であり、日露戦争の戦勝に酔いしれている時に、大胆率直に軍閥亡国を絶叫し、全世界の軍備撤廃を提唱されたことは真に義と愛の預言者であった」と語っている。

正造の手足となって働き最期をみとった谷中村残留民の嶋田宗三は「田中翁の全人格を一語で表せば愛」と述べている。

黒澤酉蔵は田中正造全集の作成を決意し、嶋田宗三とともに、全一九巻（岩波書店、一九七五～八〇年）の編纂委員会顧問を担った。

［資　料］

渡良瀬川に遊水地を設け、谷中村を廃村とする

田中正造の天皇直訴は失敗したものの世論は沸き立ち支援の輪が広がった。政府も何らかの対応に迫られ、明治三五年三月に第二次鉱毒調査委員会を設置した。翌三六年三月に「足尾銅山ニ関スル調査報告書」が提出され、その内容は、正造の求めた足尾銅山の鉱業停止ではなく、足尾銅山の予防工事、足尾の林野経営、渡良瀬川の治水事業の勧告であった。

渡良瀬川沿岸の氾濫は堤防の修築だけでは防止できないため、渡良瀬川の流量を一時的に留める遊水地を設ける必要性が述べられ、谷中村が候補地に選ばれ、栃木県による谷中村の買収計画が進められた。明治三九年に谷中村は廃村となった。

黒澤酉蔵は、母の死去もあって明治三八年に北海道へ渡っているが、晩年の短歌に、「谷中村鉱毒のため滅び果てあわれ地図より消されゆきたり」と詠んでいる。

遊水地が谷中村に設置されることが決まると、渡良瀬川沿岸の農民はそれまで一致して反対運動を行ってきたが、これを機に、上流地域は急速に運動を退き谷中村は孤立化していった。さらに拍車を掛けたのが明治三七年（一九〇四）に始まった日露戦争であった。国民もマスコミも戦況に一喜一憂し、鉱毒への関心がなくなり運動は衰退した。

正造は、谷中村に移り住み、反対運動と堤防の復旧工事に尽力したが、栃木県は本格的な土地買収に取り掛かり、買収に応じた者には代替地の貸与と補償金を、土地のない者には救済方法を約束した。正造は買収阻止のため村民の説得に駆け回ったが、村を出

▶谷中村役場跡

▶田中正造遺品の日記より
真の文明は山を荒らさず川を荒らさず村を破らず人を殺さざるべし

て行く者が多かった。明治四〇年を迎え、村に残っているのは二〇数戸となり、「残留民」と呼ばれるようになった。同年夏、県は村の堤内に住む一六戸に対し、戒告書を手渡した。その内容は期限内に各自の家屋と樹木の撤去を命じ、これに従わないと強制執行し、その費用を徴収するという過酷なものであった。

正造は、大正二年（一九一三）九月四日に胃癌のため死去するが、遺品は、信玄袋に入った小石三個、新約聖書と帝国憲法、河川調査の原稿と日記であった。

谷中村の廃村に伴い、北海道移住が始まる

足尾銅山鉱毒により、渡良瀬川沿岸の農民の生活は極度に困窮していたが、加えて明治四三年八月の関東地方を襲った大洪水が農民に致命的な惨害を与えた。栃木県は罹災者の救済対策として、谷中村を立ち退いた一部の農民、鉱毒水害を蒙った下都賀郡南部の八ヶ町村の農民、一般人を含め希望者を募って北海道移民を斡旋した。

正造は、北海道移民に対し「北海道移民は政府の奸索（かんさく）」として反対していたが、反対行動に出るまでにはいたらなかった。

こうして瀬下六右衛門を団長とする六六戸、二四〇余名の北海道常呂郡佐呂間町のサロマベツ原野に集団移住が決定し、明治四四年四月七日に医師、看護婦等が付き添い県庁を出発した。谷中村からの移民は谷中村村長の茂呂近助を中心に一六戸であった。茂呂近助は田中正造と親しい間柄であった。佐呂間町へ移住したのは谷中村からだけでなく、栃木県各地からの移住者であり、〝新しい栃木県〟を創る希望を込めて、

▶田中正造の遺品
マタイ伝（左）・帝国憲法合本（右）。（佐野市郷土博物館蔵）

正造は洗礼を受けることはなかった。谷中残留民とともに苦闘を体験し、学んだ晩年には、「聖書を読むよりは先ず聖書を実践せよ」という類の言葉を日記にしばしば記していた。（ＮＨＫ市民大学田中正造～民衆からみた近代史～由井正臣著より）

この地区を「栃木」と称した。しかし、現地は千古の密林であり、開墾は予想を越える困難で並大抵なものではなかったため、途中で開拓を諦め、栃木に戻る者も大勢おり、移住後、百余年が経過している中で、現在は三戸だけが酪農業を営んでいる。

渡良瀬遊水地がラムサール条約湿地登録に

足尾銅山の鉱害被害防止のために明治三九年（一九〇六）に谷中村が強制廃村され、渡良瀬遊水地となって既に百年の月日が流れている。現在、この遊水地は本州以南最大のヨシ原を擁し日本を代表する低層湿原であって、数多くの絶滅危惧種が生息している。

二〇一二年七月にルーマニアで開催されたラムサール条約第十一回締約国会議で国際的に重要な湿地として登録が決定された。今後とも、湿地帯の保持と環境保護が求められており、あわせて辛い歴史を背負った旧谷中村民の子孫らも誇れる遊水地として後世に残すことが求められる。

▶渡良瀬遊水地

3 北海道酪農への道

北海道開拓使当初の北海道農業

北海道開拓次官（後の長官）の黒田清隆は、北海道開拓の範をアメリカに求め、明治四年（一八七一）に二〇余名の留学生を連れて渡米し、時の農務長官ホーレス・ケプロンはじめ学者、専門家を招聘した。ケプロンは本道の気候、土質等を調査して、有畜農業が好適であると判断し、各種の種苗、農機具、家畜等の輸入を提言した。また、農耕園の開設、学校の設置等を進言するなどアメリカ農業の本道移入がはじまった。七五名の招聘者の中には、真駒内種畜場を開設したエドウィン・ダンや札幌農学校のウイリアム・スミス・クラークも含まれていた。

「日本酪農の父」宇都宮仙太郎

宇都宮仙太郎は慶応二年（一八六六）四月一四日に豊前国下毛郡大幡村（現在の大分県中津市）の養蚕農家武原文平、母やすの次男として生まれ、母の実家の宇都宮家の養子となった。

村に小学校がなかったので同郷の先輩で自由民権運動で活躍した賀来素吉（かくもときち）に論語や十八史略等を学んだ。賀来は熱心なキリスト者で、座右の銘は「聖

▶エドウィン・ダン（一八四八～一九三一）

オハイオ州で酪農をしていたダンは、多数の乳牛と羊等とともに、明治六年に来日した。明治八年に函館、明治九年に札幌に移動し、明治一五年に北海道開拓使が廃止されて東京に戻るまで、北海道の各地で多大な貢献をした。

札幌の真駒内牧牛場や新冠種馬牧場を開設し、乳肉牛、種馬、めん羊、豚の輸入とそれらの飼育管理の指導および品種改良、バター、チーズ等の製造等々、欧米の「大農

教必読」、「倹素守分博愛施人」、「宝を天に積む為め貧乏を救済し、難苦以躬居安楽分人」であり、貧民の救済を行い、身を挺して難苦にあたり、喜びを皆と共に分け合っていた聖人であった。仙太郎は後年キリスト者となり、北海道の大凶作の時には東奔西走して農民の救済に尽力し、倹素で分を守り、余剰を貧民救済に投じたのは、賀来の感化があったからと言える。

中津中学校に進学した仙太郎は政治家を志望して上京し、東京神田の共立学校に入学した。この学校は予備校的なもので一〇〇〇人程度の学生がおり、周りの学校も含めて政治家希望の学生が数千人もいることが分かり政治家になることを諦めた。その後仙太郎は、後に外務大臣になる青木周蔵の弟が営む牛乳屋を目にし、畜産業が今後必要になるのではと思うようになる。身体が弱かった仙太郎は、下宿屋隣の牛乳屋に牛乳を飲むように言われていた。これらのことが重なり、しだいに牛を飼い、牛乳屋になろうと思うようになった。

明治一八年（一八八五）、牛を飼うすべを習い、畜産についての研究を志した仙太郎は、北海道にアメリカの畜産指導者が招かれていることを聞き、北海道に渡る。函館に着いた二〇歳の仙太郎は、札幌に町村金彌（まちむらきんや）という人物が場長を務め、アメリカから招かれた畜産の専門家エドウィン・ダンが助言、指導している牧場が真駒内にあることを聞く。早速、牧牛場を訪ね、牧夫として働くことを頼み、不慣れな牧草積みや冬の寒さに耐えながら修行を積んだ。牛舎は三階建てで雇教師ダンの設計によるもので、牛は一〇〇頭位いた。その後仙太郎は、本場のアメリカに渡り実習を受けたいと思うようになる。方式」に沿った農業を紹介した。

ダンは同時に札幌農学校教授も兼任し講義や実習を担当した。ダンの献身的な指導による種が播かれなかったなら、今日の北海道酪農の発展はなかったであろう。

ダンが北海道に播いた、酪農、畜産の種は、町村金彌から宇都宮仙太郎や子息の町村敬貴（まちむらひろたか）らに継承され、今日の北海道酪農の基礎を作った。

▶町村金彌
（一八五九～一九四四）
福井県越前市に生まれる。東京に出て苦学しながら工部大学校予科に入

明治二〇年（一八八七）、二〇日間の船旅でカリフォルニアに着いたが、気候から考えてワシントン州が良いとのアドバイスを得て、シアトルに移動した。最初にデビス農場で働き、次にガラー農場で働き、ガラーからウイスコンシン州立大学のヘンリー博士を紹介してもらい、大学の農事試験場で働くことになる。彼の勤めは朝晩の搾乳と昼は牛舎一般作業であった。彼の搾乳は優秀で、英語力も重宝された。その後、試験牛の担当になり、飼料分析、サイレージ等の研究に関わった。更に、朝晩の搾乳をしながら、ショートコース（学校）に通うことを許された。ヘンリー博士が動物の飼育、バブコックとウオールト両博士が化学的分析と牛乳の試験、キング博士が灌漑と土管排水等を担当する授業を受けた。

また、仙太郎は大学で三カ月の酪農講座を受講し脂肪率検定法を身に付け、農事試験場に戻り、更に、牛乳検査員として働くためガラー農場に戻ることになった。

そのガラー牧場に、真駒内牧牛場の当時の場長であった町村金彌から一通の手紙が届いた。

「北海道の雨竜で三条実美（さんじょうさねとみ）右大臣ら華族諸侯が、五万町歩の大地を開墾し華族組合雨竜農場建設する計画があるため、その事業に貴重なるご助力を賜りたい」との内容であった。

明治二三年（一八九〇）春、三年間にわたるアメリカでの酪農修行を終えた仙太郎は、同年六月から北海道雨竜農場の建設に参加した。雨竜農場は、学し英語を学ぶ。当時、札幌農学校が官費生を募集しており、金彌は同校二期生として入学。同期生に新渡戸稲造、内村鑑三ら錚々たるメンバーがいた。二期生で畜産の道に進んだのは金彌一人である。

札幌農学校で、金彌はダンから直接、酪農、畜産を学ぶ。同校卒業後、一八八一年、開拓使御用掛に採用され、真駒内牧牛場に勤務。真駒内牧牛場は、搾乳からバター製造に至る最先端の酪農場であった。

▶宇都宮仙太郎（一八六六～一九四〇年）

三条実美、蜂須賀茂昭、菊亭修秀らが発起人となって華族たちが出資をしあっての事業で、その事業主任が町村金彌であった。

しかし、明治二四年（一八九一）二月に中心人物であった三条実美を失って、計画は空中分解となり、開墾した土地は出資した華族の手に分割し、未開の地は国に返還された。雨竜農場解散に際し、金彌は跡地約八五町歩を買い取り町村農場を開いた。しかし、この大規模農場も厳しい経営を余儀なくされ、土地を五町歩ずつ区分けして小作方式に切り換え、金彌は十勝開墾合資会社農場の農場長に就いた。

仙太郎は、札幌に戻り、退職金代わりにもらったホルスタインの子牛と町村牧場から借り受けた牛一頭をもとに、明治二四年（一八九一）九月に札幌市北一条西一六丁目（現在の知事公館の一画）に宇都宮牧場（搾乳販売営業）を開始し、バターの製造販売を行うようになった。

明治二八年（一八九五）に乳価等の有利を考え大きな夢をもって東京に移転し牛乳搾取業を開始した。しかし、うまく行かず、わずか三カ年で東京を去り、再び札幌区大通に移転し搾乳業を始めた。明治三五年（一九〇二）には札幌郡白石村にサイロのある近代的牛舎を建てバター製造を始める。その三年後、黒澤酉蔵がやってきたのである。

宇都宮仙太郎は同郷の先輩である福沢諭吉の「洋学を学ぶ進取の気風」に強く触発され、諭吉の説く「独立自尊」の精神を生涯貫いた人物である。

▶宇都宮牧場（白石）跡の看板

▶宇都宮牧場・アルファルファ

黒澤酉蔵の酪農入門

明治三八年（一九〇五）七月、酉蔵は横浜から室蘭行きの貨物船に乗った。船賃は食事つきで五円。札幌に着いた酉蔵は、紹介状を持って北海タイムス社の阿部宇之八を訪ねた。阿部は後に札幌区長（市長）になった人物である。「役人や月給取りはご免だ」との酉蔵の希望を聞いた阿部は、やや考えてから「牛飼いはどうかね」と薦めた。阿部が紹介した宇都宮仙太郎牧場は、白石村（現札幌市白石区菊水）にあった。

仙太郎は酉蔵に会って開口一番、牛飼いには三つの徳（得）があると自説を聞かせた。三つの徳とは、「役人に頭を下げなくてもよい」、「動物が相手だからウソをつかなくてもよい」、「牛乳は日本人の体位を向上させ健康にする」であった。酉蔵はこの話をすっかり気に入り、翌日さっそく宇都宮牧場の牧夫として働くことを決めた。ときに明治三八年八月一日であった。

即決即断、牧夫見習いを決めた酉蔵ではあったが、早朝に起きての労働は、ほとんどが手作業という重労働の時代であったので「体のあちこちがミシミシと痛む」辛いものだった。だが、寸暇を惜しんで専門書を読みふけった。

乳搾りも、もちろん手作業の時代なので、当初は素人の酉蔵には触らせてもらえない作業であった。負けず嫌いの酉蔵は、縄の先に小さな大根をくくりつけて交互に引っ張ったり、真綿で乳房の形を作り、首にかけて乳搾りの練習をした。「見上げた人物だ」、仙太郎はひそかに酉蔵の将来を嘱望した。

足尾の鉱毒被害民救済運動で投獄され、無罪の判決を受けたにもかかわら

※キーワード
独立自尊
酪農三徳（得）

ず、酉蔵の行動を監視する警察の目は厳しく、渡道後にまで及んだが仙太郎は生涯このことを口にしなかったという。

明治三九年（一九〇六）一二月、酉蔵は徴兵され、札幌市月寒の歩兵連隊に入営した。営門まで送ったのは仙太郎ただ一人であった。両者の絆は強く深く結ばれていたのだ。

酉蔵の軍隊での生活は、貴重な思索の場にもなり、その勤勉さが認められて三カ年のところを二カ年で在営期間を終えた。その間に支給された一円二〇銭の月給のうち、必ず一円を貯蓄し将来の独立に備えた。酪農自営への強い決意であった。除隊の翌年の明治四二年（一九〇九）一月、投獄時に触れた聖書の「愛の教え」を改めて覚え、日本メソジスト札幌教会（現在の日本基督教団札幌教会）で杉原成義牧師より洗礼を受けた。「酪農の自営」と「聖書の教え」の両輪は、進むべき人生行路の軌道に乗ったのである。

酉蔵「牛一頭からの独立」

明治四二年（一九〇九）四月、念願の酪農自営の時が満ちた。山鼻東屯田村（現在の札幌市中央区南一〇条西八丁目あたり）の屯田兵将校の居宅と、乳肉兼用種エアシャー一頭を借りての第一歩であった。土地と家は佐藤善七による口利きで守谷民治から借用し、借牛は円山村の上田万平の好意によるものであった。

酉蔵は朝三時前には起きて、飼料給与、除糞、搾乳といった管理を一人で

エアシャー種

イギリス原産で白地に赤色斑紋の牛。北海道の厳しい環境に耐える牛として明治一一年に開拓使によって輸入された。

▶佐藤善七（一八七四～一九五七）

仙台藩より移住した佐藤幸内の長男として有珠郡で誕生。屯田兵設置に伴い明治九年に山鼻村に入植。

北海道庁に勤務しながら山鼻でリンゴ園「自助園」を経営していたが、右大腿部の切断を余儀なくされ、道庁を退職。

こなし、五時には近隣の酪農家から卸してもらった牛乳を荷車で配達して回った。冬は氷点下一〇度を下回る日が当たり前。雪をかき分け天秤棒（てんびんぼう）を担いでの配達であった。寝る時間は三～四時間。初一念を貫くこと苦闘五年、大正三年（一九一四）には乳牛も十数頭に増え、一人前の酪農家としての地歩を着実に固めていった。

後年酉蔵は、自らのつくった酪農学園の機農高等学校卒業式で、「家の者よりも必ず一時間早く起きて働け」との送別の辞を贈った。五〇年以上も前の体験を語ることを忘れず、参列の父兄を感激させている。

大正四年（一九一五）春、小学校教師をしていた瀬尾梅江と結婚するが、朝三時から夜一〇時まで、コマネズミのような働きぶりは変わることはなかった。この超人的な精神を支えたものは、亡き母への「家督挽回（かとくばんかい）への誓い」であった。

札幌における牛乳搾取業の新しい展開

札幌牛乳搾取業組合の毎月四日の例会（二七ページ参照）では、決まって洋食のカレーライスにコーヒーの昼食をとりながら、組合員は組合長の宇都宮仙太郎からいろいろな新しい面白い話を聞いた。仙太郎が購読していた酪農雑誌「ホーズ・デイリーマン」の話題もホット・ニュースであった。その話の中で、先進国の優秀な牛の血液を導入することが将来のために必要でないかということになり、仙太郎が代表して、アメリカに牛の買い付けに行くことになった。

その後、宇都宮仙太郎、黒澤酉蔵等の影響を受けて酪農業に転進した。日本メソジスト札幌教会にて、酉蔵より二年前の明治四〇年に札幌組合教会（現札幌北光教会）で受洗。大正二年の大凶作には、同メンバーで救済会を結成した。

▶牛乳を配達している酉蔵（一九〇九年頃）

明治三九年（一九〇六）一二月、仙太郎は再び渡米し、ウイスコンシン大学に立ち寄り、同州の酪農状況を視察し、ホルスタイン純粋種を数十頭購入した。これらの乳牛が後年北海道の酪農生産力向上に大きく貢献した。

折から、仙太郎の恩師・ウイスコンシン大学総長ヘンリー博士の定年退官記念講演が州農民約一五〇〇名を集めて開催された。ヘンリー博士は、「ウイスコンシンは、ぜひデンマークを模範として進むべきである」と声涙ともに下る講演で聴衆に深い感銘を与えたのである。仙太郎もヘンリー博士の言葉に感動し、明治四〇年（一九〇七）五月の帰国後、さっそく酉蔵らにデンマーク農業を模範にしようと推奨した。このことは、仙太郎や酉蔵らによる北海道製酪販売組合設立（大正一五年（一九二六））につながる重要な転換点にもなった。

[資　料]

北海道農業の歴史（明治中期～昭和）

開拓当初の北海道農業は、国家保護による国内からの「移民政策」によって進められた。明治一九年に開拓使が廃止され、その後北海道庁が設置された。開拓計画も保護移民政策から資本の移入政策に転換され、府県資本家の開発への投資が始まり、大農場経営、貸地農業が始まり、小作農民の開墾、穀菽（こくしゅく）（穀類と豆類）農業に変わっていった。折角のアメリカ農業

▶ウィリアム・A・ヘンリー博士（一八五〇～一九三二）

ヘンリー総長の退官記念講演（宇都宮仙太郎による紹介）

「その時ヘンリー博士は、デンマークの農業とウイスコンシンの農業を比較して数字を以て説明されました。デンマークが北欧の一小邦でウイスコンシンの四分の一にも足らぬ面積を有し、それがしかも土地瘠薄（せきはく）、天然の資源に乏しい国でありながら農業は進歩し、農民は豊かに文化の程度も高く、組合の発達せることは世界一であることを説き、ウイスコンシン

も国民性に馴染めず、畜産も一部の農家以外には開花しなかった。

札幌牛乳搾取業組合

札幌では、明治二十年前後、搾乳業（牛の乳を搾ってそれを売る牛乳屋のこと）の開業が始まった。明治二八年頃には、宇都宮仙太郎が中心となって、サッポロビールから出るビール粕を購入する搾乳業者十数人により札幌牛乳搾取業組合（申合せ、通称四日会）が、設立された。毎月四日を例会日とし、飼料代を持ち寄って組合員が集まった。この例会は昭和一八年頃まで続いた。

はぜひデンマークを模範として進むべきである。」（宇都宮仙太郎「余は何故にデンマークの農業を推奨せしや」『デンマークの農業』北海道畜牛研究会、一九二五年）

北海道開拓における養牛

当初は、役（農耕）・肉兼用、堆肥生産が主目的で本格的な牛乳生産（酪農）は明治末期以降である。

「酪農」はDairy Farmingの訳語で、「乳牛飼育・流通・加工」の総称として明治中期から専門誌に登場する。

4 デンマーク復興とグルントヴィ精神（三愛主義の原点）

※キーワード
土壌改良
三愛精神
国民高等学校
協同組合精神

一八世紀半ばのデンマーク農業

デンマークの一八世紀半ばの農村状態は真に惨憺たるものであった。多くの農地は放漫なる地主、貴族、君主の領地として専有され、農民の大多数は「土地緊縛制度」に支配され、四歳より三五歳まで生まれた土地に在留させられた。「土地緊縛」の時期が経過すると領主から困難な土地を小作させられた。その他の労役にも従事させられ、毎週特定の日数を領主直属の農地で働かされ、重い税金を課せられた。

しかし、一七八四年にフレデリク六世が父王クリスティアン七世の摂政となり、一七八八年に「土地緊縛制度」の撤廃を宣言し、農民解放、自作農化、農地改革を実行した。これがデンマーク農業における第一の改革であった。更に、穀類、家畜類の輸出税の撤廃と、新小作人の独立援助のための信用貸付資金の制度を作った。この改革により、農業は著しく進歩を遂げ、公立学校は改善し知的文明は発展した。しかし、ナポレオン戦争（一八〇三～一八一五年）が欧州全土に広がり、デンマークは政治的破産の状態となり、艦隊は全滅し制海権を失い、領土も縮小され、国民は失望状態になった。穀類の価格は生産費以下になるなど、一八二三年より一八二五年の間は国内農

業生産にとって一大危機を迎えた。更に、一八四八年にはデンマークと対抗するシュレスヴィヒ公国およびホルステン公国との間に戦争が起こり、勝利するものの永きに渡る公国との関係は埋まらないまま、一八六四年に起きたプロイセンとの戦争の敗戦に伴って、シュレスヴィヒ公国とホルステン公国の領土はプロイセンに渡すことになった。国民的第二の打撃であった。

デンマークのユトランド半島の荒地

戦争に負けて肥沃な土地を失い、残されたユトランド半島は、ヒース地、沼地、砂地等による荒地であった。多くを占めるヒース地とは、氷河時代末に運ばれた砂礫（されき）、堅牢な結晶岩の破片により形成されている土地である。ヒースとは、北イングランド荒野に自生するツツジ科の潅木の一群で、それが生えるのでヒース地と呼ばれている。

一般に開墾の通常の方法は、風の強くない春の日に、ヒースに火をつけて焼き、出来るだけ早く灰を鋤き入れし、マール（肥料にする泥灰土）を加え耕した。遠方の沼地からアッシュピート（泥炭塊）を運び、焼いて灰にして、鋤き込むことも行われた。

また、エンリコ・M・ダルガス（一八二八～一八九四）による植林運動が開始された。各農家では牛や馬、豚等の家畜が飼育され、その糞尿も土地改良に役立った。この結果、北海から本土の西海岸を吹き荒らした烈風は、砂丘の堆積物より防止され、島の周囲に植えられた松や樅（もみ）は、絶え間なく吹き荒れ

▶一九〇〇年ごろのヒース地帯（ユトランド半島中部）

る北西風の勢力をそぎはじめた。広大なる常緑樹及び落葉樹は荒地を価値あるものに変えた。また、内地の沼沢地より流れ出る水は、乾燥する丘陵灌漑（かんがい）に利用され、生産的牧場に変えられた。

多くの原野と牧場は、全ての畜舎の糞尿を利用することで耕作と施肥により生産性を増した。

敗残の国民は、「外で失ったものを内で取り戻そう」という呼びかけのもと、荒れ地を肥沃な土壌に変え、デンマークをよみがえらせたことから、「土地は神聖なり」を標語としている。

デンマークが敗戦からの復興を成し得たのは、国民の修養と勤勉によるものにほかならず、その精神的指導者の一人として牧師グルントヴィがいる。彼は敗戦当時八〇歳の老齢であったが、デンマークの歴史の中に刻まれている「神を愛し、人を愛し、祖国を愛する」という思想を説いた。宗教家としてだけでなく、政治家として、教育者として、九〇歳近くにして亡くなるまで現役であった。

グルントヴィの影響力

ニコライ・F・S・グルントヴィの父は、牧師をしていたヨハン・O・グルントヴィ、母はカトリーネ・バンで、一七八三年九月八日に南シェランのウズビュの牧師館で生まれ、窮乏の生活の中で育った。父は、ルター派のキリスト教に固執した牧師であった。

デンマーク国民の共通標語

「土壌は神聖なり、故に丁抹の全土を使用せよ、如何なる地積も濫用するなかれ、然もこれを善く待遇せよ。」

（『丁抹の農村と其の教育』より）

▶ニコライ・F・S・グルントヴィ（一七八三～一八七二）

グルントヴィは、一八〇〇年にコペンハーゲンの大学に入学し牧師の資格を取得し、卒業後は北欧古代史の研究に身を入れ、北欧古代史の詩とデンマーク史の詩をデンマーク語で編集して出版した。それは、自信を失っているデンマーク人の心の底に潜んでいる誇りを引き出したかったためである。また、キリストの復活から、デンマークの復活を堅く信じていた。一八三七年にコペンハーゲン大の学生から歴史の講義を懇望され、五一回に渡って、歴史的人生観、国家観、世界観等の講義を行った。回を重ねる度に聴講する学生が増え、多くの学生が共鳴し、更に講演を切望する学生が多かったため、彼は「デンマーク協会」を作り、麗しき詩を吟唱し、政治、宗教、文学に関する意見の交換をした。

グルントヴィはデンマークでの国民教育の切実さを痛感していたため、国民高等学校の創設を希求し、一八四四年には南ユトランド地方に国民高等学校を開校した。しかし、プロイセンとの戦争のために閉鎖された。各地のデンマーク協会を通して国民高等学校設置の希望が寄せられ、はじめは官立高等学校を国民高等学校主義に改めることを考えたが、文部大臣等からの反対が強く、民衆的国民高等学校を創設させた。

当初、グルントヴィの国民高等学校運動は、「生の奥深さに目覚める」人文主義的構想をもっていたが、時代環境もあって、農民の社会意識の覚醒からの民衆運動として進められた。

国民高等学校（フォルケホイスコーレ）とは

グルントヴィは、当時の学校はラテン語やギリシャ語の習得に熱心で、知識偏重に傾斜していることなど、教育制度に疑問を持っており、学者や牧師に対し批判的でもあった。グルントヴィは母国語を重視し、形式にとらわれない教育によって人格形成をはかり、祖国の発展と国民の幸福を実現する場としての「国民高等学校（フォルケホイスコーレ）」が必要であると提唱した。国民高等学校は大人及び青年の学校であり、生徒の年齢は一八歳から二五歳で、時にはそれ以上の者も少なくなかった。生徒の多くは農村社会はもとより各種の職業の人々によって構成され、富める者、貧しき者、あらゆる家庭より集まった。その目的は職業的教授より、幅広い教養を身に付けた人間的発達を志向するものであった。

フォルケホイスコーレ運動のもう一人の代表的指導者はクリステン・コルである。ホイスコーレは、数カ月の全寮制の形態で、教師と学生が共同生活をし、口頭での語りかけや講義を中心とする小規模な学校で評判を集め、デンマーク各地に作られた。フォルケホイスコーレが地域の民主的討議の場となり、農民たちは政治意識、社会意識、自治意識に目覚め、社会的には協同組合運動が展開された。

コルが、一八五一年にリュスリンゲの古い農家を改造してホイスコーレを開校した時に、官立の高等学校は学課課程により教育が行われていたため、モンラズ地方監督（学校査察官）が学校を訪ねてきて「学課課程でなく何に

▶クリステン・コル（一八一六～一八七〇）

靴屋の息子として生まれた。学校の成績が良かったので、教師になる道を選び、一八三四年に師範学校に入学した。在学時代からグルントヴィの考えを学んでいた。一八四九年は、デンマークがプロイセンに暫定的に勝利し、立憲君主制に移行し、民主的な市民革命が進行した年であった。そうした時代の波を感じ、自分の理想とする学校をつくろうと考え、フォルケホイスコーレ運動を開始した。

よって教育をするのか」とコルに問いかけた。コルは、「本校は、国民に神、隣人、祖国を愛することを教えようとしている」と答えている。コルにとってのフォルケホイスコーレの根底にある理念はグルントヴィの教えの「三愛精神」であったのである。

当時、新たに開設されたフォルケホイスコーレを担った人々の大半が、コルの学校の出身者であった。このため、グルントヴィはフォルケホイスコーレの父と呼ばれ、コルは母と呼ばれた。

デンマークの協同組合と国民高等学校

デンマークの復興は、荒地の開墾・植林事業、国民高等学校の普及に加え、協同組合制度によってもたらされた。

その特徴は生産者と輸出業者の組合にあった。酪農協同組合が世界一発達した国であるデンマークには組合法等という規則などはなく、国民の必要によって組合が作られている。そこでの組合員同志の約束が法律以上の力を持っている。例えば酪農協同組合についてみても、全農家のうち組合に加入しているのは九割余である。小農、中農は殆ど全部進んで加入しており、その組合工場の施設も世界で最もすぐれたものであり、国際市場に直結する高度の活動をしている。

協同組合活動の精神的基礎になっているものは、言うまでもなく国民高等学校の教育である。国民高等学校は直接には協同組合の活動と関係がなく、

▶一八八二年協同組合製酪事業が始まる。最初の工場の記念画。

▶一九八八年デンマークバターの輸出協同組合の設立。一九〇〇年にできたラッパマークの商標。

学科も特別そのためのものは何もない。しかし、協同組合の底に流れている思想と、それを運営する人の理念は、この国民高等学校の深い泉から湧き出たものに外ならない。農民の知的な順応性と、改革に対する協同性は、国民高等学校の教育によって培われてきた。精神的気力と、相互の信頼性によって喚び起こされたものであった。これが組合法も規則もなく、自主的に伸びるデンマーク協同組合の精神となっている。

今日のデンマークの協同組合

デンマークの協同組合は、政府の監督や援助を受けないで、農民の必要から民主的に発達したものであり、一事業一組合主義で発達した。協同組合によって搾取がなく、対立がなく、農民は自己の努力に対する報酬を完全に自分のものにしている。協同組合の運営は、一人一票主義を原則に徹底した平等主義で運営され、理事を選任して委員会を組織している。

デンマークの協同組合運動先駆者たちが唱えたこと

エッチ・シー・ソーネ：「われわれの協同組合は倫理的、人間的な精神を養って、勤労者階級の生活を向上させ、その自信を強め、その圧迫された状態から彼らを自由にしようとするものである」

サバリン・ヨハンセン：協同組合運動は人々の経済的福祉の向上ということよりも、もっともっと貴重な目的をもっている。その最も重要にして意義のある究極の目的は、人々をより高い道徳的基準にもち上げ、組合員を、より有能かつ独立的ならしめ、何よりも立派な人々にすることである」

（「農業國デンマーク」黒澤西蔵著より）

5 酪農協同事業の船出

※キーワード
デンマーク農業
北海道畜牛研究会

有畜農法による寒地農業の確立

北海道開拓初期の土地は肥沃であったが、収奪農業によって地力は減耗するばかりであった。更に悲惨な冷害を繰り返し、とりわけ大正二年（一九一三）の冷害は、稲作の適地とされる上川・空知でさえ水稲の収穫が皆無で、秋になっても穂が直立のままという惨状をもたらし、北海道農民の生活は著しく疲弊していた。

教会活動をしていた宇都宮仙太郎はじめ、黒澤酉蔵・佐藤善七らは、被害地に義援の金品を送る活動を全国的に展開した。農民が食べている草の根・ドングリ・藁（わら）を粉にして作った団子を路傍で掲げ、餓死寸前の生活情況を知らせる中で農民救済を訴える酉蔵の熱弁は、聴く者の肺腑をえぐるものがあった。

その後、昭和に入っても繰り返される大冷害の体験から、北海道の農業は本州を模倣した稲作を進める農業政策では、農民の困窮を救うことはできないとの信念を強く持つに至った。

主食と位置付けられる米の不足を理由に、適地を軽視した政府の造田政策を厳しく批判し、冷害を根絶するための適地適作農政を国に迫った。

大正末、酉蔵自身が経営拡大のために入手した農地（南一四条西一五丁目）は、開拓以来の収奪農業によって劣化し瘠せたものだった。相次ぐ冷害体験から、寒地農業の基本は家畜を軸とした有畜農法であるべきことを確信した。

酉蔵は有畜機械化農業と還元農法について次のように説明している。

「地力を培養し、農地の天分・使命を発揮させるためには、有畜機械化農業の確立まで進展させなければならない。『家畜無ければ農業無し』の様に、農業には家畜が必ず付随している。これは無畜農業の行き詰まりを物語っている。家畜を飼えば自然乳肉皮革を生産し、農業経済を潤沢にするが、それ以上に、家畜の堆厩肥が有畜肥料として適合するためである。

土地から取ったものを再び土地に還すのを『還元農法』というが、この農法は家畜なくして完全に行うことが出来ない。土地からとった作物を飼料として家畜に与え、家畜の腹を通して糞尿となし、これを堆厩肥の形で再び土地に還元するのが原則である。堆厩肥は基礎肥料であるが肥効分として足りないものは化学肥料で補う必要がある。結論としては、有畜機械化農業の採用は堆厩肥の生産によって肥培を行い、畜力機械力により人力の及ばぬところを補う。

更に農業は他の業態とは全く趣を異にし、第一に天の力によらなければならない。太陽の光と熱、空気、風雨等、大自然の気象、風土によらなければ一粒の米、麦といえども実ることは不可能であって、これは人間力の如何ともしがたい事である。第二は地の力である。どんなに天候が順調であっても、地力がない瘠せ地や砂漠のような土地では作物が成育しないのは自明の理で

・家畜なければ肥料なく
肥料なければ農業なし
ゆえに家畜なければ農業なし

古今東西の鉄則として、宇都宮仙太郎はその信念で、畜産のための畜産ではなく、農業のための畜産をやらなければならないと、北海道農業のあり方として考えを述べていた。

煉乳事業の勃興

明治初期からバターと煉乳がそれぞれデンマークとアメリカから輸入されていた。煉乳は育児や病人が消費するだけであったが、明治後期から洋菓子の原料としてその需要が増加した。国内でも、煉乳製造技術の確立により、煉乳会社が複数設立され、牛乳搾取業者が牛乳を煉乳会社に販売

ある。しかし、地力の培養増進は人間力において充分に達成し得るものなる事を記憶せねばならぬ。第三は人の力である。天の恵み、地の力が如何に豊かであっても遊惰放逸の農人にはこれを如何ともしがたい。丹精勤労なる農人にして初めて美田、沃野に成し遂げられる。そのため、『天の力、地の力、人の力が渾然一体』となって、所謂神人合一の境地に至って、ここに初めて農業という聖業が成り立つのである。だからこそ、人類は神代の昔より未来永遠に至るまで、農によって育まれ、農によって養われて行くのである。」

北海道製酪販売組合の創立過程

大正三年（一九一四）に第一次世界大戦が勃発し、北海道の畑作物の青エンドウ、澱粉原料のジャガイモ、亜麻等が海外へ輸出され好況となったが、大正九年（一九二〇）に戦後恐慌が始まり、農産物の価格が大暴落した。更に、大正一二年（一九二三）九月におこった関東大震災の被害者救援のため食料輸入関税が撤廃されたことにより、乳製品、特に、煉乳価格の下落は著しかった。

翌年旧税率に復活したが、中小零細規模の製酪所の経営は悪化の一途をたどった。そのため、乳価が下がり、遂には牛乳を引き取る製酪所も減少した。このように、乳業界の不振により酪農民は厳しい局面に置かれた。

大正一〇年（一九二一）に、デンマーク農業に関心をもっていた宇都宮仙太郎は娘婿の出納陽一夫妻をデンマークに送り出し、デンマーク酪農を研修させた。仙太郎は陽一の手紙から、デンマーク農業が発達した三つの要素をするようになった。大正四年、宇都宮仙太郎ら札幌牛乳搾取業組合の主要なメンバーが、初の牛乳出荷組合である札幌牛乳販売組合を組織した（大正六年に札幌酪農組合と改称）。

▶出納陽一（一八九〇～一九七六）

大分県出身。宇都宮仙太郎の次女琴子と結婚し、酪農事情研究のために、夫妻でデンマークに留学する。帰国後、上野幌に出納農場（後に宇納農場）を開設し製酪所も建設した。「北海道製酪販売組合」は、工場がなかった

知った。第一は教育であり、第二は組合組織の発達であり、第三は国が独立農民を造るのに、努力したことであった。

同年に、北海道庁長官に愛知県知事であった宮尾舜治（一八六八～一九三七）を迎える中で、デンマーク方式による北海道農業の振興が提言され、道庁から三人の技師と深澤吉平をデンマークに派遣することになった。また、デンマークから酪農家を招聘し、実際の経営を模範農場として実践してもらった。招聘したモーテン・ラーセン家族には、札幌真駒内の育種場で一五haの中農型経営を、エミール・フェンガー家族には札幌琴似の農事試験所で五haの小農型経営を実践した。

大正一二年（一九二三）二月に宇都宮仙太郎、佐藤善七、黒澤酉蔵らが札幌付近の関係者に呼びかけて北海道畜牛研究会を設立した。主な取り組みは、関税引上運動、デンマーク農業の研究（デンマーク研修帰国者からの報告、デンマークから招聘した模範農場のエミール・フェンガー、モーテン・ラーセンの講演）、第二期拓殖計画に向けての牛馬百万頭計画策定の検討等であった。

北海道畜牛研究会は、大正一四年（一九二五）に、第一回畜牛家協議会を開催し酪農民の厳しい局面の打開策について協議した。牛乳をそのまま販売するだけでは酪農は振興しない。この際、北海道農業の革新をめざし組合事業を開始すべきであるとの意見が大勢をしめ、寒地北海道農業確立のために「酪農民のための酪農民が経営する酪農民の組合」である有限責任北海道製酪販売組合を札幌・石狩・小樽・空知の酪農家六二九人の出資によって創設ため、この製酪所を借りて製酪事業を始めた。

その後、同場は酪連に譲渡され、出納は酪農経営の指導に当たった。また、デンマーク農業の第一人者としても評価され、著書も多い。酪農義塾教育にも関わり、酪農学園短期大学・大学の教授として教鞭をとった。

▶佐藤　貢
（一八九八～一九九九）

佐藤善七の長男として生まれ、大正八年（一九一九）北海道帝国大学卒業後渡米し、オハイオ州立大学で酪農研修を積む

した。

組合長理事に宇都宮仙太郎、専務理事に黒澤酉蔵らを選出し、事業として、牛乳の販売に加え、加工品はクリーム、バター、チーズとした。

信念のバター製造

酉蔵らは、酪農を単に原料乳を生産する役割だけとは考えなかった。生産から加工、流通までを自らの手で一貫させることによって、その付加価値を高め利益を酪農民に還元するという発想をもち、国産バターの本格的な製造を始めた。

札幌村野津幌（現在の厚別区上野幌）の宇納農場の一隅を借りてのスタートだった。バター製造の技師はたった一人、後の雪印乳業株式会社の初代社長となる佐藤貢であった。佐藤貢は、アメリカのオハイオ州立大学で学んだ酪農技術の第一人者であり、毎日毎日、手回し式のバターチャーンを腕が腫れあがるほど回した。

北海道製酪販売組合連合会（酪連）を設立

有限責任北海道製酪販売組合の創立主唱者たちは、各自が大きい牧場を経営し、バターを製造し、得意先をもっていたので原料乳の買い入れ制限については、直接困ることはなかったが、大部分の酪農家は路頭に迷う状況であり、北海道の酪農のために、大正一五年（一九二六）三月、北海道製酪販売

一方、バター、チーズ、アイスクリームの製造を学んだ。

帰国後、上野幌の宇納農場で北海道製酪販売組合バター第一号を生産、苗穂に工場を建設しバターの量産態勢を確立した。昭和一七年（一九四二）興農公社では常務、専務取締役を歴任し、戦後、雪印乳業株式会社初代社長に就任した。

酪農学園では学校教育、機構整備、財政確立につとめ、理事長として施設拡充、教育の充実、大学院設置、国際交流の推進などに取り組んだ。

組合連合会（酪連）を組織した。当時は、独占資本による産業組合経済に対する圧迫を反産運動と言っていたが、その反産運動の最も激烈な時代でもあった。酉蔵は、その当時のことを、「事務所も石狩支庁の一隅で、専任職員も雇えず、支庁の方を嘱託としてお願いし、専任の重役も無論酪連時代はほとんど無報酬に近かった。協同主義を基軸に、売れぬバターを売れるバターにするために、職員・工場員・役員共に禁酒・禁煙して改良し、遂にロンドンにまで輸出して、雪印バターの名声を伝える根底を培った」と語っている。

その後、酪連は、戦時中の昭和一六年（一九四一）三月に、明治・森永の両社を合併して北海道興農公社に改編し、農機具、土地改良土管、皮革、肉加工、種苗等を取り扱う広汎な総合農業公社となり、終戦後の昭和二二年一〇月に北海道酪農協同株式会社に改組した。そして昭和二五年（一九五〇）に雪印乳業株式会社となった。

北海道酪農の完成は、「事業の合理性・科学性」と「精神性・教育性」と「セクト主義から協同主義へ」の三点をモットーとして進められたと言われている。

▶酪連発祥之地（札幌村野津幌）

▶北海道製酪販売組合仮工場バターチャーン

6 農民教育事業の船出

農民教育重視と北海道酪農義塾の設立

北海道の農業は府県の暖地農法をそのまま取り入れられていたが、総じて凶作、不作に悩まされていた。そのため、寒地農業、適地適作としての有畜混合農業が提唱され、乳牛を飼養する農家がだんだん増えてきた。しかし、酉蔵らは、酪農経営は多くの知識、技術を必要とし、特に道東、道北の冷涼地帯での酪農経営には農業教育が必要であると考え、昭和八年（一九三三）九月五日の北海道製酪販売組合連合会（酪連）の第一二回臨時総会において、「社団法人北海道酪農義塾」の設立を決めた。

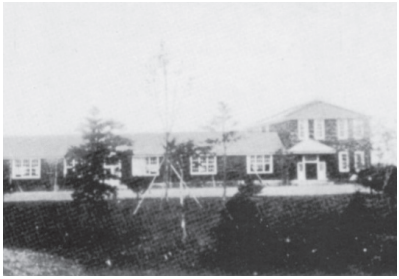
酪農義塾の定員は酪農科三〇名、製酪科二〇名とし、塾生の年齢は、小学校卒業後に二年以上の酪農について実地の体験を積んだ一七歳以上二〇歳以下とした。札幌村苗穂の酪連用地内に、塾舎、施設を整備して一〇月一日に第一歩を踏み出した。入学希望者は多く、増員して採用した。

塾長に就任した黒澤酉蔵は、「前途ある農村の中堅青年を選び、農民としての確固たる人生観を把握させ、立地条件に適応した寒地農業の理論とその方法技術を体得させる。これを自家経営に実行させて活きた模範を示し、隣保相助、知らないことに因る不合理を明らかにし、これを指導改善して経営

※キーワード
農民道五則
循環農法
酪農讃歌

酪農義塾へ酪連からの財政支援

酪連が設置者となって酪農義塾が開校されたが、酪連がその経営費を支出する形で運営されていた。



▶酪農義塾の塾舎兼寮舎（酪連内、一九三四年）

の合理化を進めたい」と決意を語っている。

農民精神として必要とするものを指導精神として、「農民道五則」を定めている。

「農民道五則」は左記の通りである。

一、農民は誠そのものたれ（農民は正直であれ）

一、農民は天地の経綸（けいりん）に従え（農民はその土地の役目を知れ）

一、農民は土地を愛せよ（農民は土地を肥やせ）

一、農民は勤労を尊び倹約を守れ（農民は無駄をせずにうんと働け）

一、農民は協力一致せよ（農民は協同組合によって団結せよ）

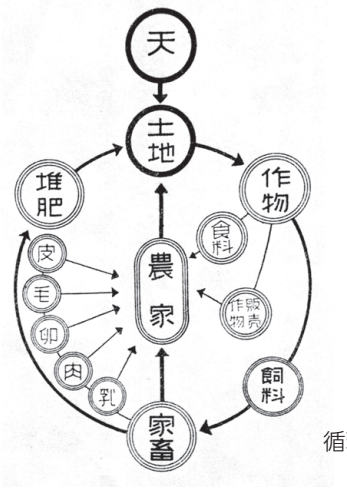
農民道第一から第三までの説明として、酉蔵は「農業は天と地と人との合作によって出来るものであるから、天地と血が通い一体になって真の農業が成立し、人類の生命力が生まれるのである。そのためには農民それ自体が誠そのものでなければならない。また、農民は土地の役目を研究し土地の持って生まれた最高最大の使命を果たさせることが必要である。北方の地の役目を果たさせる北方農民の使命がある。そのためにも、気象状態、土性土質、作物の適性、耕種肥培、害虫駆除、農畜家禽の飼料管理等の知識なくしては真の適地適作農業は営めない。愛土の具体的業として、田畑への堆肥散布、土地改良や土地の深起し、除草等を一心不乱で行うことで、肥沃な土地になり旺盛なる地力を培養することにより、食料増産にもつながるのである」と語っている。

▶酪農義塾開塾時の役職員、前列左より佐藤善七、宇都宮仙太郎、黒澤酉蔵

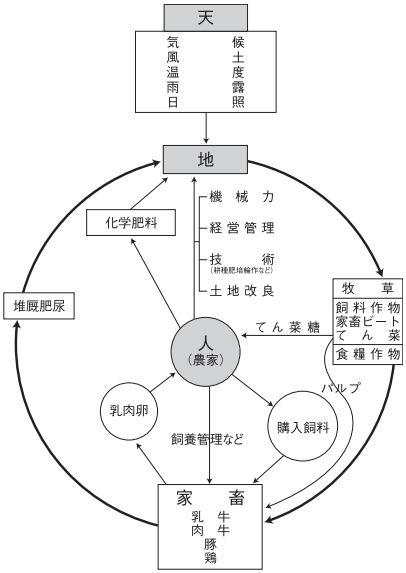
▶酪農義塾開塾式（一九三四年）

以上の考えは、適地適作寒地農業の理論として「循環農法」と酉蔵が説くものにも表現されている。昭和一二年（一九三七）に、左上の図として、初めて酪農義塾の刊行物『農民道』に掲載された。酉蔵は、このような図を利用して、農業は天（風土・自然条件）、地（その土地の持つ特性）、人（機をとらえた経営能力）の合作であり、地力の増進を基本とした適地適作でなければならないとする理念を示した。

酪農と循環農法の原理



循環農法の原図



循環農法図

▶酪農義塾農場（札幌村三角　一九三五年）

さらに酉蔵は循環農法を次のように説明している。

1　作物は天地の力と人の努力丹精によって出来る。

2　作物は普通の農家自身の食料と販売作物であるが、酪農業では更に飼料作物を栽培し家畜の飼料に供用する。

3　家畜は乳肉卵毛皮を生産し或は労力、産仔によって農家を益し且堆肥、尿を生産するものである。

4　堆肥及尿は地力を増進させ益々作物が出来る。

5　作物がよく出来れば出来る程家畜を多く飼うことが出来、肥料は益々増産し土地は愈々肥え其生産力を増加する。

6　即ち作物の力によって土地を肥し、土地の力によって作物を増産するというように循環的に生産の増加を招来する。

田中正造の思想に学ぶ

酉蔵は寒地農業の確立を生涯の使命とするが、北海道の大地を健土とし、適作農業を行うことで冷害を克服することは、正に足尾の鉱毒被害民の救済運動と共通するところがあることに気付き、次のように述懐している。

「それは田中先生の鉱毒民救済の根本にあった思想『国土の尊厳を犯すものは必ず滅びる』ということです。田中先生は『国土は未来永劫何億年経っても生かして使える。われわれ人類が生きているのは国土があるからだ。その国土の一寸の土地でも粗末にする考えは間違っている』と言っています。

▶循環農法を説く酉蔵

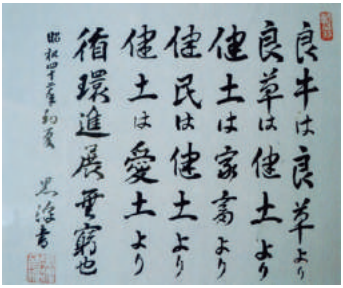
北海道の冷害といい、公害による国土の破壊といい、これまでずい分長い間、天災とかやむを得ない災害として扱われてきましたが、いやしくも国富を増進し、国民福祉を向上させるために興した産業が、平気で国土の尊厳を傷つけるようなことがあっては、本末転倒であり、冷害も公害も人間が作り出したものです」と語っている。

「健土健民」の提唱

健土健民とは酪農義塾の誕生とあい前後して使われ始めた酉蔵による造語である。

「土地は、目に見える運動はなく、耳に感じる呼吸はないが、実は絶えず運動し、呼吸をしている。土に生命があるが故に、これに依存する動植物にも生命が生まれ、生命の根源は土にこそ在る。土地は生命の根源であり、万物の母体であるから、土地が健康であれば母体の生む万物も健康になる。大地の健康を増進することを私は『健土』と称する。これは私の新造語である。健土の根本は治山、治水にある。健土の実行は治山、治水から始めなければならない。森林により気温の調整、風雪の防止がされるが、北海道では冷害・凶作も森林によって緩和される点が少なくない。

健土でなければ健民は生まれない。家畜も然りである。例えば、酸性土壌で生育された乳牛は、石灰が乏しいため骨軟症になったり結核病になる。不健康な土地、病的な土地は、これを癒(いや)して健康な土地に戻すことが出来る。



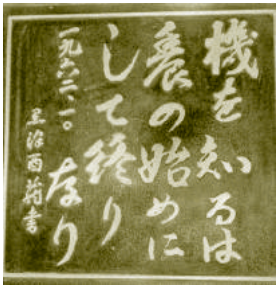
例えば、酸性土壌には石灰を施用し中和させ、土地の排水のためには暗渠排水工事を、或いは客土を行い、深耕を併せて行えば良い。これをもって牛馬を飼育すると健康は回復し、健康馬、健康牛となる。人間も同様に不健康な土地からとった食料を摂取して健康になるはずはない。」

三健論 ―健土・健民・健産―

酉蔵は、「健康」という用語を幅広くとらえている。人の健康とさらには国家の健康について、次のように説明している。「個々の人間の立場からみた健康とは、まず最も重視すべきは心の健康『健心』である。次いで身体の健康『健身』、そして経済（家計）の健康『健財』に至る。すなわち健心、健身、健財の三つの健康が備って、はじめて人生の意義が全うされる。これを国家に置き換えれば、健康な国土、健康な国民、健康な産業の三つがあって、初めて国家の健康が保たれている。この三健のバランスと連携が重要であり、「『健産』の基本は農業である」と強調し、「健康な国民は健康な食生活から　健康な食料は健康な農業から　健康な農業は健康な農地から　健康な農地は健康な農民から　健康な農民は健康な心身から　まず心田を肥沃健康にせよ」と三健論を説いた。

酪農は健土健民の母

酉蔵は健土健民の実現のためには酪農が必要であるとしている。



▶校舎にはめ込まれた「機農」のレリーフ

▶バレイショの収穫（一九四二年ごろ）

「北方冷涼地帯や高原地帯、瘠せ地は、恵まれない地帯であるが、天恵には厚薄はなく、天地の経綸を究めるなかで農民を養ってくれる。酪農業は、この恵まれない地帯にとってまたとなき農法である。酪農業とは乳牛を主体とする有畜機械化農業のことで、各種農業形態中、最高の科学的農業である。特に、天恵薄き地帯にあって、健土健民の実を上げるためには唯一の方法である。故に、深く酪農業の経営原理を究め、その真髄を体得すれば、如何なる農法にも応用できる。酪農業こそ農業経営の極致に達するものである。従って、酪農業においては、乳牛を飼うのは乳を搾ることを全目的とするものでもない。土地を肥培し、土地を健やかにし、健土健民の実を上げるために牛を飼うのである。」

酪農義塾から野幌機農学校へ

酪農の将来に情熱をもやす優秀な学生たちは酪農義塾で実際教育を受けて卒業し、北海道の酪農発展に大きな貢献をした。しかし、日中戦争・太平洋戦争と戦争が長引くにつれ、農業の担い手は激減し、不作地が広がった。農村の生産体制をどうするかという問題に対して、黒澤酉蔵は、指導者をつくることが先決問題であると考え、その要請を目的に、学制に基づく三年制の甲種農業学校の設立を図った。昭和一七年（一九四二）、江別西野幌（現在の江別市文京台緑町）に一六〇haの学校用地を購入し、野幌機農学校を開校した。酪農義塾の教育方針を踏襲し、全寮制教育による、農場即教室、実習

野幌機農学校及び学園への財政等支援

酪連が他社と統合して北海道興農公社になった時も、資金並びに土地、建物、施設等が譲渡され、義塾の財政基盤が確保された。

機農学校設置の時には、寄付金、北連からの援助、興農公社並びに役職員より寄付を受け、開校することができた。

教職員給与についても、義塾以来、酪連及び興農公社等の援助、寄付金に依存していた。戦後になっても、学園財政は厳しい状況にあったため、多くの教職員は北海道酪農協同株式会社（後の雪印乳業）の名目嘱託社員として給与の支払いを受けていた。

即授業の実学を教育方針とした。各農場に農具、家畜、寮等の施設を備え、教師を農場長として生活を共にさせ、晴耕雨読で学び、実力ある農民魂を磨き上げ、腕のある指導者を養成することを目的とした。

遠大な構想の下にスタートした機農学校も、太平洋戦争の最中で、「兵農一致、皇道農業」の精神が強調され、学級編成も何小隊、何分隊と呼称され、寮生活の規律も軍隊生活になぞらえ、教師も生徒も大きな苦難を味わうことになった。

昭和一八年（一九四三）一〇月に「教育に関する戦時非常措置方策」、昭和一九年（一九四四）三月に「学徒動員実施要領」、同八月には学校報国隊の組織の下に「学徒勤労令」が公布され、昭和二〇年（一九四五）三月に「決戦教育措置要綱」が、五月に「戦時教育令」が公布された。本校は農場をもち食糧生産の第一線にあったため外部への勤労動員は少なかった。その中で、職員の応召者も二三名に増え、千島派遣隊より道庁に現地自活のため農耕指導者の要請があり、本校生徒の派遣依頼があった。昭和二〇年（一九四五）五月二〇日に本校より生徒一八名が千島に機農隊として出発し、同年七月一五日に無事任務を終えた。

野幌機農学校は、戦後の学制改革により、昭和二三年、財団法人興農義塾野幌機農高等学校となった。

「酪農青年研究連盟」の育成

一九四五年八月、第二次世界大戦は疲弊と混迷の中で終結した。

黒澤酉蔵は、無気力が世相を覆う中で、いち早く酪農再建運動を指揮した。その中で北海道の小村の酪農青年達が、自発的に学習を続けていることを見逃さなかった。

早速、酪農青年研究会の立ち上げを支援し、その組織はやがて全国に輪を広げ、「酪農青年研究連盟」へと発展した。

全国研究会の優秀発表者には黒澤賞が贈られている。

協同組合精神と世界協同体実現の夢

黒澤酉蔵は、「戦後の日本農村の再建に、如何なる共同組織体が採用されるかは、大きな課題であるが、何れにせよ、土地改革を先頭とする日本農業改革には、働く農民の協同団結が必要であり、そして精神的に、物質的にその農民の権利と義務とを公正に、国家社会に貢献しうるような協同組織を、さながら我々の健康な五体の血管の如くに作り上げなければならない」と語っている。

さらに、「北海道の製酪組合はデンマークの製酪協同組合を模範にして、今日の発達を見たのであったが、酪農の発達は農業の技術的な経営的な面からのみ考えるだけでは、その発達は困難である。それを発達させるためにも、農村の協同組織が確立されなければならないことを、我々はデンマーク農村の復興と建設とに深く教えられた。我々は、更に進んでより多くを学び、創造させなければならないだろう」と語っている。

酪農義塾の精神、すなわち酪連精神、義塾精神といわれるものは、協同組合精神であり、酉蔵は世界協同体の実現に夢を抱いていた。これは、青年時代から酪連の創立、義塾の設立、戦後の日本協同党の結成まで一貫して持っていた理想であり、協同組合の理想は、相互扶助の精神であり、共存共栄の精神であった。

時を同じくして、農民運動や協同組合運動などを通して社会改造運動を展開したのが、賀川豊彦である。賀川は、友愛・互助、世界平和の実現のため

▶賀川豊彦（一八八八～一九六〇）

賀川豊彦は神戸で生れ、徳島で育った。二一歳のとき、神戸のスラム街に

に生涯をささげた世界の偉人として知られている。協同組合主義の社会構想から、農業と農村のあるべき姿を小説の形で述べた『乳と蜜の流るゝ郷』には、デンマーク農業を範とした立体農業やその成功例として酪連の取り組みが紹介されている。後に賀川は酪農学園との交流から、「酪農讃歌」を作詞した。作曲者は賀川豊彦の長男で教会音楽家として知られている賀川純基（一九二二～二〇〇四）である。

住み路傍伝道を開始、若いときからキリスト教と社会運動に人生をささげ、「貧民街の聖者」として知られていた。また、神戸購買組合（現・コープこうべ）を設立するなど、日本の労働運動、生活協同組合などでも大きな役割を果たした。一九二〇年の自伝的小説『死線を越えて』と一九三五年の協同の道を説いた『乳と蜜の流るゝ郷』は当時の大ベストセラーである。

ノーベル文学賞とノーベル平和賞の候補者として推薦されていたことでも有名である。

7 酪農学園大学への道

建学の理念に「愛神、愛人、愛土」の三愛精神を位置づける

終戦とともに皇道を基調とした教育理念を改め、学園においては、今後の精神教育の支柱をどこに置くか、慎重な協議がされた。

黒澤酉蔵は、理想の北海道農業としてこれまで、デンマーク農業を「範」とする有畜混合農業を展開し、組合製酪事業を興してきた。しかし脳裏には、戦争に敗れ、亡国の瀬戸ぎわに立ったデンマークを世界の理想国に導いた宗教家で教育者であったグルントヴィの信仰心と「神を愛し、人を愛し、祖国を愛する」の三愛主義を教育の柱とする情熱が焼きついていた。

酉蔵は、「敗戦国デンマークは、森林も石炭、鉱産もなく、発電の水資源もなく、そのうえ太陽の恵みさえ薄い風吹きすさぶ荒野だけであった。ただ一つの資源は万世を貫く真理であった三愛主義と青年教育が実を結び、新たな理想国、酪農王国としてよみがえったのだ」とし、佐藤善七や札幌教会の白戸八郎牧師らと相談する中で、昭和二一年（一九四六）九月一日の財団法人興農義塾野幌機農学校の理事会で教育の指導理念をキリスト教の聖書に置くことを決定した。間もなく、大森三郎牧師を招いてキリスト教主義による教育が始められ、昭和二三年（一九四八）に学園用地に教会（現在の日本基

督教団野幌教会）が設立された。

さらに学園は戦後の学制改革に伴い、昭和二四年（一九四九）には法人名を酪農学園に改め、昭和二六年（一九五一）には学園の基本法規である「寄附行為」の第一章に、「キリスト教に基づく三愛精神と実学教育とをもって建学の精神とする」ことを明記した。

大学設置構想から酪農学園大学部へ

黒澤酉蔵はこれまで寒地農業・有畜混合農業の確立、そして農民教育を進めてきた。さらに、将来のために酪農の基本的研究が必要であり、それに根拠を置いた具体的指導教育を徹底し、確固たる精神的土台を築かなければならないと考え、酪農大学の設置を考えた。

当時アメリカの文教政策の一つとして、キリスト教会の協力の下で、日米合同による国際基督教総合大学設置の構想が打ち出されたため、この一環として設置計画を進めた。しかし、途中で教養学部のみを設置する計画への変更が決定されたため、野幌における大学設置計画は幻に終わってしまった。そこで独自でキリスト教酪農大学として文部省に申請した。しかし、認可されず、昭和二四年七月一一日、北海道知事認可による各種学校二年制の「酪農学園大学部」として出発した。

▶酪農短期大学工事（昭和二九年）
―旧野幌機農学校の校舎兼宿舎を改築―

酪農学園短期大学の開設

間もなく、学校教育法の一部改正により、短期大学制度が設けられたため、昭和二五年（一九五〇）三月、文部大臣認可の下に酪農学園短期大学を設置し、四月開校した。教育方針を「キリスト教による人間教育を基本に、神、人、土を愛する三愛精神と実学によって酪農人とその指導者を養成する」とした。

愛神、愛人、愛土の三愛精神を基盤とする実学による酪農人の養成は、農場と乳製品工場を教育の場として、教師、学生が思いを一つにして酪農の科学究明に取り組んだ。講義の外に、広大な農場では、耕作、播種、除草、収穫、貯蔵、各種機械・器具の取り扱いを実習し、各畜舎での乳牛の飼育、管理が行われ、酪農に必要な知識と技術を体得させた。

黒澤酉蔵は、農業教育については、例え寒冷地帯であっても冷害や凶作の災厄に脅かされることのない、天地の経綸（けいりん）に順応した安定農業の基盤である酪農の研究確立を目的とする実践教育であると語っている。

初代学長に樋浦誠を招聘

昭和二三年（一九四八）、岐阜農林専門学校（岐阜大学農学部の前身）教授であった樋浦誠（ひうらまこと）は、大学創設のため学長予定者として招聘されたが、大学設置が不認可となり、翌年酪農学園大学部の設置により学長となった。

樋浦学長はキリスト教信仰を土台とした新しい大学の建設に情熱を燃やし、自ら寮に宿泊して学生と生活を共にし、日曜日には教会の礼拝に導いた。

▶樋浦　誠
（一八九八～一九九一）

毎週一回の礼拝には、殆んど全学生が信仰の有無にかかわりなく出席し、全教師がそれぞれの立場で宗教教育に奉仕した。

卒業する者の約五〇％が営農に従事し、「大学農人」と呼称する新しい人間類型を農村に送ることになった。後に学園長になった佐藤貢は「樋浦先生は黒澤園長が教育理念として決定したグルントヴィの三愛精神に強く共鳴し、この精神に基づき有益な酪農人及び指導者の育成に心血を注ぎ、情熱に燃えて学生の教育指導に当り、率先垂範学生の魂を躍動させ、宗教と科学に関する開眼に大きな力を発揮した」と述べている。

実学教育を基軸とする短期大学

樋浦が黒澤園長の教育理念に共感をもち、新しい農学系大学創設に身を投じる決意をしたが、その動機は、彼の著書『農村青年と科学』（昭和二三年）に記されている「新しい農村建設と青年の向学」の実現にあったのではないかと推察できる。

樋浦は、農村生活改善の実現を困難にしている根本原因は農村における「無学」であり、農村においては「無学」を恥とせず農村改善の鍵は「向学」にあると断じている。そして「農村の青年たちよ、私は何よりもまず、諸君が大いなる夢の人であることを期待する。人間らしい人であることを要請する。現実だけが価値であり、現実のはるか彼方を望み得ない底の者は、ただただ近視眼者が眼鏡を失ったがごとし状態にあるといえる。夢なき青年は不具者

樋浦誠『農村青年と科学』より

科学は体験や実験を通して
現象の仕組みを究明する仕事である
科学の知識が深く高くなるほど
新しい疑問を持つようになる
解れば解るほど解らない世界が
新しく展開してくる

である。理想のないのは青年の恥である。理想のないところに人間はないからである」と語り、大いなる理想を持つことを期待した。

無知からの解放

また「科学する」ことを強調している。

樋浦は学生たちに「君たちは豚だ」と語ったと伝えられている。その真意は、大学でも三愛塾でも学生たちに向き合い「無知からの解放」をモットーに掲げていたからである。何故ならば、樋浦は、過去の農業人があまりにも農業の兵法（科学する）に無関心であり過ぎていたかを痛感していたからである。そのため「体験」と「科学」の違いを学生に説いていた。

科学は体験や実験を通して現象の仕組み（原因）を究明する仕事であり、誰かが思いついたとか、考えただけでは科学にならない。必ず体験や実験によって観察、考察し、その現象がどんな経路でどんな原因から由来するかを突き止め、更に計画的に体験を繰り返すことが求められる。これらによって証明された知識を科学知識とよび、科学知識を統一して集成したものが「科学」であると説明している。

短期大学の設置後さらに高度の教育によって、酪農の振興発展をはかろうと考えていた学園関係者は、四年制大学の設置に向かって努力を続けていた。昭和三五年（一九六〇）一月二〇日に大学設置が認可され、わが国初の酪農学部を置く酪農学園大学が誕生した。学科は酪農学科の一学科で、その目的

と使命には、「本学は基督教の精神によって人間教育を行い酪農の科学並びに実際を教育し以て神を愛し人を愛し土を愛する三愛の精神に徹する有為な酪農人及び指導者を養成することを目的とする」と掲げられている。

四月二〇日の開学式において、黒澤西蔵は学園長として酪農学園大学の目的とその精神について述べたが、その要旨は次のようである。

「いまや民主主義が大流行で猫も杓子も民主主義でなければ夜も日も明けぬような勢でありますが、多くの人々はその根元がどこにあるか、またその意義がどうであるかも窮めることなく、社会の表面を吹きまくっているが、民主主義の本義は実にバイブルの中にあるのであります。

『天は人の上に人を造らず』という言葉がありますが、天とは何か、それは神であり真理であります。これを東洋流にいえば儒教の教えがこれを説き、西洋ではキリスト教の教えがこれを説いております。立派な人をつくるにはどうしてもバイブル中心の教育でなければならない。これは私の信念であります。

神はどんな人にも平等であります。私は形式ではありません。信念でやっているのであります。しかし信仰は自由でありますから決してこれを強いるものではありません。仏教がすきならば仏教で良いのでありますから誤解のないようにしていただきたい。キリスト教にも決して弊害がないとは申しません。けれどもバイブル其物は立派であります。バイブルが立派であるからやっているのであります。

▶黒澤酉蔵銅像
「寒地農業発展」の願いを込めて北方を指し示す。昭和三七年（一九六二）寿像除幕式が行われた。

諸君はわが酪農学園大学創設最初の第一期生であります。どうぞ立派な学風をつくって下さい。」

開学時、酪農学科の一学科をもって発足した酪農学園大学は、その後の多くの困難を乗り越え、学科の増設と大学院の開設を行い、平成一〇年（一九九八）には、酪農学部、獣医学部、環境システム学部の三学部八学科と酪農学園大学短期大学部の総合大学へと成長、発展した。

そして平成二三年（二〇一一）四月より、農業、食料、環境そして生命に関する総合科学教育を目指す大学として大きく展開してきている。

酪農学園の建学の精神である「三愛主義」と「健土健民」を継承、実践し、世界の福祉向上に貢献する人材を養成することが、酪農学園の使命であることには全く変わることはない。

なぜ建学原論か？

建学原論企画担当

建学原論では、創立者たちが学園を築き上げてきた歴史と建学の理念を扱っている「理解編」に加えて、教職員による建学の理念に基づいた教育・研究の実際を扱う「現状編」、そして、社会で活躍している卒業生による本学の理念を体得した様々な分野での働きを扱う「継承編」、これら三部から構成されている。

「現状編」「継承編」では、その年々で講演する担当者が内容を構成し、実際の授業では当人の生の声として学生の皆さんに語りかけられる。それに対して「理解編」では、創立者の経験や思いを生の声として聴くことはできない。若い人にとっては、古い時代の話で今の社会とは関係ない、建学の精神でさえ自分とは関係ない、と思いがちなのは想像に難くない。ただ、歴史的に古いと言っても、建造物のように風化したものではない。それぞれの時代に、人々が、創立者たちが、どう生きたのか、どう考えて行動したのか、そして、どのような経緯で酪農学園大学が存在しているのか、書物・資料に書かれた様々な記録が多数あり、人々によって語り継がれた内容などもある。それらの中には、社会が変化しても奥深い大切な意味を持つものがあり、時代を問わず普遍的

な意味をもつこととして認識されるものがある。「三愛主義」「健土健民」という建学の理念は高く、それらを唱えた創立者たちの思いをまず知ることは、知行合一の支柱となるであろう。

学生の皆さんがこれから大学で得る知識や技術、また学ぶ学問には、すぐに世の中で役立つもの（今必要とされているもの）とそうでないもの（今あまり必要とされていないもの）がある。すぐに世の中で役立つものを知る事は大変面白く興味が湧き結果もすぐに得る事ができるだろう。しかし、そのようなものは往々にして直ぐに役立たなくなることも多い。建学原論はどうだろうか。

なぜ建学原論か、そもそも明確な答えが出るようなものではないかもしれない。しかし、高学年になってから、あるいは、卒業してから、それらしき答えを見い出したという話を耳にする。この疑問を心の中に持ち続けることによって、酪農学園大学において学ぶ意味、あるいは、学んだ意味、が明確になる折が幾度かあるのではないだろうか。

［資　料］

酪農学園教育「建学原論」の生い立ちと成長

学校法人酪農学園は、学園の基本法規である寄付行為第2章に、法人の目的として、建学の精神を以下の通り明記している。

「この法人は、教育基本法、学校教育法及び私立学校法に従い、キリスト

教の精神に基づいて、神、人、土を愛する三愛主義を建学の精神とした人格の完成を目指し、健土健民の思想の下、高邁な学識と技能を有する知行合一の有能な農業人並びに社会の人材を養成することを目的とする。」（二〇二〇年四月一日改正）。この目的を具現化すること、すなわち、建学の精神に基づいた教育・研究の実践、ここに、酪農学園大学の存在意義がある。

大学の構成員となった学生の皆さんへ、建学の精神の理解醸成を行うのが自校教育「酪農学園学」であり、その中に含まれている建学原論は柱となる科目である。この科目は二〇一一年度に実施された教育組織の大改革に伴うカリキュラム改訂以降に開講されている。自校教育がカリキュラムの中に含まれているのは当然だと考えられる一方、二〇一〇年度までは授業科目として存在しなかったのが事実である。本科目「建学原論」は、その内容および運営についてはかなりの年数にわたって多くの人の議論が必要で、それらを経てようやく出来上がったものである。

本学の「建学の精神」が建学原論と形を整え、教育課程の中に根付いていくようになったのは二〇〇七年からの酪農学園改革の渦に始まる。

日本の私立大学において、各大学が必ず持つ「建学の精神」の継承は、一九九〇年代に入ると時代の流れの中でやや希薄になってきた感があった。二〇〇〇年代には、私立大学の改革が始まった。各大学で自校教育（大学の建学の精神や歴史、社会的な役割、行われている教育研究の内容や成果など、自らが所属する大学（自校）の特性や現状を教える授業。私立大

学にとって、自校教育を実施することは、学生に対して、自校の目的・理念・使命を周知し、愛校心を培う一方で、教える側である教員や、また職員にとっても、自校を理解するための機会となる）が検討された。

酪農学園では、創立者の提唱した「建学の精神」をどのように伝え続けることができるかを課題として掲げ、当時学園のその任にあった原田勇学園長（二〇〇七―二〇一二年度）の発案でまずは大学教職員を対象の談話会「精神遊学舎」を二〇〇九、二〇一〇年度、就業前に月一回のペースで開催し、教職員それぞれの立場で学園への思いを語り合うことから始まった。学園改革としてまず高校の改組（二〇一〇年度）が行われ、続いて、大学での教育組織変更（二〇一一年度）へと発展した。

学園改革に伴う新教育課程で展開する酪農学園大学の自校教育は、建学原論をはじめとして、各科目の準備検討委員会による議論を経、数々の教職員の貢献により、具体的な形となって、二〇一一年度より「酪農学園学」としてスタートした。建学原論のテキストの編集・作成にあたっては、酪農学園教育委員会内に設けられた「建学原論推進委員会と作業部会」が基本構想を立案して、作業が進められた。その後も毎年、建学原論企画担当の任を受けた教員は、多くの人々の協力を得て、文献を調べ、聞き取り調査を行い、事実をより明確にしようとしてきている。「酪農学園学」の理念は普遍的なものであるものの、スタート後も毎年、実施に当たっての工夫・改良が検討されている。

付一　酪農学園の建学の精神

黒澤　酉蔵

酪農学園の建学の精神は健土健民であります。これはいままで話してきたことからもお判りになろうと思いますが、酪農というものは単に牛を飼い牛乳を搾り、バターやチーズをつくるというだけではありません。それと同時に、日本の国土を豊穣なものにし、肥沃なものにするという大きな使命があるのです。真の国土づくりです。これが健土です。健やかな土地づくり、これが酪農です。

この国土は地球が存在する限り、未来永劫何億年経っても滅びるものではありません。実に尊いものです。全てのものはここから生まれ、ここへ帰る、母なる大地です。私もあなたがたもやがては大地に帰るわけです。この土地をもっと健康なものにするのが人類の大きな使命といわなければなりません。

また、世界の同胞はいま三十億とか三十五～六億とかいわれますが、これら全人類のからだと頭脳をりっぱなものにする、心身共に健康にする必要があります。が、これはなんといっても食べものが元です。本当の健康食が与えられて、人類は初めて心身の健康が得られるのです。それにはもっともっと高級栄養食品であり高級蛋白食糧である牛乳や乳製品を飲んだり食べなけ

▶『黒澤酉蔵』青山 永 著より

ればなりません。そのためにはもっともっと安く牛乳を生産する必要があります。それにはさらに酪農を発達させ、デンマークの酪農のように育てなければなりません。

このように二つの大きな使命を自ら果せるのが酪農です。単に牛を並べ、牛乳を搾るというのは酪農ではありません。健土健民の思想を十分体得した酪農民をふやし、これが酪農の主流となり、遂にデンマークに達する、そのために有為な人材を育成する。これほど重要な使命をもっているのが酪農学園なのです。これが建学の精神です。

よく学園では実学ということがいわれます。私もそうでなければいけないと思ってきました。ただ、勉強したり頭で理解しているだけでは酪農はできません。まして指導者にはなれません。学理と実際が不離一体でなければまた、現実の役に立ちません。圃場と牛舎と教室と研究室がお互いに補い合い、より進んだ経営方法、経営技術を開発し教授していくのでなければ学園を創立した価値がなくなります。新しい時代にふさわしい若い農民を育てなければ学園の価値はありません。

この点については大いに反省すべきものがあります。実学という点になると、酪農学園は十分ではありません。機農学校はとにかく実学ができておりますし、短大第二部もこれに沿っています。通信教育もまずまずでしょう。しかし短大第一部と四年制大学の方では欠けるところが多いと思います。

これをどうしたらよいか、直接には園長の責任でありますが、教授法、い

▶希望の塔

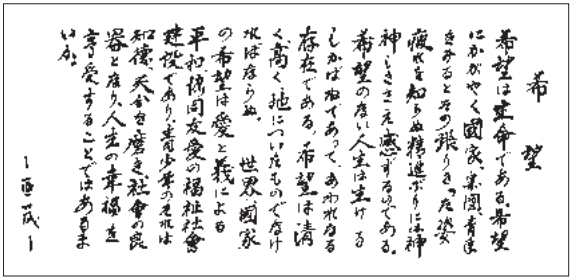
き方をこれから研究しようじゃありませんか。実学が本当に体得できるような学園に、実学がみについた学園に早く改善したい。これは実は甚だ申訳なく思っておるところです。

一体、日本の農業教育の欠点は受ける生徒が農業の実際を知らないというところにあります。また受けさせる父兄の方も分家させるよりも学校を出して月給取りにでもさせる方が良いと考えて二、三男を近くの農学校へ入れるということが多かったのも周知の事実です。卒業しても農民にならないものに行なう農業教育ですから、実際はどうでもよい、学校の方もそれに迎合して形式的に教えることにしてお茶をにごす、これが実相だったといえます。

当然、教育方針も内容も資格をとらせること肩書だけをとるのにふさわしいものに堕落してしまい、いつの間にか農民をつくる、腕も心もしっかりした農民をつくることを忘れてしまい、実際にはさっぱり役に立たない農学が栄えるようになってしまいました。

しかし、酪農学園だけは本当の農民をつくり、実際の農業の改革に役立つ研究をする教育機関でなければならないのです。

私はあえて申し上げておきましょう。日本には農学はあっても農民教育はない、と。農民に寄生するものを育てる教育はあっても、農民をつくり上げる教育というものはないといってもよいのです。この日本の旧弊を打破するために農民自らがデンマークを範にして自らの努力で守り育ててきたのが酪農学園だといえるのです。



酪農学園の神髄をなすものはいま一つあります。それが三愛精神です。いくら酪農の実際にくわしくなり、技術が上達して、免許皆伝の腕前になっても、人間の心のおき方が間違っていてはいけません。このため真実の三愛精神を師弟共に会得する必要があるのです。

我々の理想とするデンマークがあれほどりっぱな福祉国家となり、酪農王国となったのは三愛精神に徹したからにほかなりません。デンマークを亡国の危機から救い、今日の理想社会に再生させたのは三愛精神によったからです。神を愛し、人を愛し、土を愛するというのがグルンドヴィの教えでありました。デンマーク人は本当に真面目にこの精神を実践し、酪農にいそしんだものです。

これは、機農高校の井上錦次先生がデンマークから帰ってから聞いた話ですが、片田舎のある停車場に先生が降りました。日本でデンマーク農業の実際を指導してくれたショナゴーさんを尋ねるためでしたが、通りがかりの青年に道を聞いた。すると私が案内しますよと実に親切にいってくれる。ほっとして駅を出ようとすると、その青年は井上先生に、手に下げている大きなカバンは駅においていくように何度もいう。しかし先生は旅行中両手のカバンは離したことがない。第一、駅などに置いて盗られては大変だと思い頑として聞かないでぶら下げていった。ようやくショナゴーさんの家につくと、こんどはショナゴーさんが、こともなげに、なんだその重いものをどうして

下げてきたんだ、駅においてくればよかったのに、という。案内してくれた青年は青年でチップを出してもそんなものはいらないといって帰っていく……。こんな話でした。デンマークは正直な国です。旅人のものを盗ったり、困らせたりはしません。デンマークの青年は当たり前のようにカバンをおいていても盗られないことを知っていたが、井上先生はそんな世界は知らなかったのです。また、青年の旅人の迎え方は聖書にもあるとおりです。これを実行しているのです。

いまの日本ではそれどころではありません。母親は子供を教育するのに、人を疑ってかかれといっているのです。誘拐されるのが恐ろしいので、子供の一人遊びやお使いもダメだと教え込んでいるじゃありませんか。なんと情けないことでしょうか。これでどうして文明国といえますか。

日本人は好景気が十年か十五年続いたといって有頂点になり、生産力が世界第二位だ、やれ第三位だと騒いでいますが、人間の魂の腐っていることは最劣等ではありますまいか。こういうことでは一体どうなりますか。私がまず、グルンドヴィの三愛精神に徹せよ、というのはこのためです。本当の人間ができない以上金なんか問題ではありません。生産力がいくら伸びてもダメです。こんなものは一朝にして没落してしまいます。

私たちがデンマークに学ばなければならないのはこの点です。理屈とか講釈ではありません。実行です。毎日毎日の行い、心のおき方をバイブルにあるとおりにしなければダメだということです。

二重人格、三重人格でどうして良くなりましょうか。私はこの学園のバックボーンはどんなことがあっても三愛精神でなければいかんと確信しています。グルンドヴィのあの熱烈な信仰と愛国心、これは世界人類が歩むべき道だと思っているのです。

私は戦後、北海道に世界連邦建設同盟の支部をつくり、いまもその会長をつとめています。これも三愛精神の究極の教えである世界は一つである、一つでなければいけない、という信念から出た行動であります。けれども愛国心のないものがより集まったって世界連邦ができるものではありません。また空想空論であってもいけません。現実に即して一歩一歩本当の平和の道に進んでいくべきであろうと思います。

その意味では現代社会においても我々が学ぶべきは北欧であります。デンマークであり、ノルエーであり、スエーデンです。スエーデンの如きは百五十年ものあいだ、どの戦争にも参加したことはありません。デンマークにしても、ノルエーにしても第二次大戦でドイツに侵略されるまでは戦争に加担していません。かといって決して無防備ではありません。スエーデンの如きは世界第三位の空軍を擁しておりますし、北欧三国とも国民皆兵です。これは他国から侵略されないためです。他から断じて犯されず、他をも断じて犯さない、というのがスエーデン人の国民一人一人の信念であり、北欧人の生き方であります。私は日本もこうならなければいけない、こうありたいと願っています。

▶グルントヴィ教会
『農業國デンマーク』　黒澤酉蔵 著より

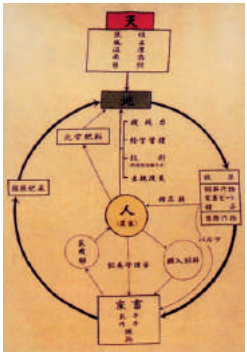
いずれは各国の軍隊はいらなくなります。世界は必ずそこまで進歩します。世界は一つになる、これが私の理想です。

ですから私が三愛精神を提唱しているのは決してお題目ではありません。どうしても、この心のあり方でなければ世の中が進みません。明るくなりません。本当の仕事はできません。協同主義の仕事にはなりません。

三愛精神とは真心をもって接するということです。協同主義とはだれかれと差別せずに心の底から信頼し合うことです。信頼し、真心をもって接すれば、どんな人間でも撃破できます。しかし、偽りがあってはいけません。本当の信念と真心があれば、神様は必ず守ってくれる、これが私の信念であり、三愛精神の解釈でもあります。

どうかみなさん、みなさんは酪農学園を構成する一員として、学園協同体の一員として学園の歩みきたった道程を共にふりかえり、さらに研究し合い、ともどもりっぱな日本を築き上げ、酪農をさらに伸ばすために日本一の学園を築き上げていこうではありませんか。

（酪農学園だより・第三号・一九七〇年）



循環農法図

酉蔵が提唱した「循環農法」の概念図。「地下資源には限りがある。しかし土の寿命は尽きることがない。その生命力を育てれば無尽蔵の資源となる」「農業とは天地人の合作によって、人間の生命の糧を生み出す聖業である」とし、土や環境を大切にする循環農法を説いた。

付二　酪農学園の建学精神　三愛主義とは何か

黒澤　酉蔵

酪農学園は酪農を通して日本はおろか、全人類の福祉向上に貢献し得る人材をはぐくみ育てる使命を持つ本邦唯一の実学習得の教育機関である。

したがって、私は建学の精神を何に求めるか、と自らに問うたとき、聊か（いささか）も躊躇（ちゅうちょ）することなく、三愛主義をもって学園に生命を吹き込み、理想を与え、そのバックボーンとすることにしたのである。

神を愛し、人を愛し、土を愛す、という三愛主義は古今東西永遠不滅の真理に照し、断じて恥じるところがない。

それどころか、この三愛主義をもって再興したのが我等の理想郷福祉平和国家デンマークである。私は偉人グルンドヴィにならい、日本再建の祈りをこめて、三愛主義をもって酪農学園の建学の精神としたのであり、これを体得させ、実践する人材を輩出させることを使命とした学園でなければ存在価値はないと確信している。

では、一体、三愛主義とは何であろうか。その根本をなす愛とは何であろうか。聖書をひもとけば「神は愛なり」とあり、聖パウロがコリント人へ書き送った手紙には次のように記してある。「山を移すほどの強い信仰があっ

ても、全財産を人に施しても、自ら焼かれるために泰然と火中の人となっても、真の愛がなければ全ては無益である」と。これは怖るべき言葉であり断言ではないか。

邪心、邪念、邪想を持てば、これはまた寝言の如きものに聞こえるであろう。しかしまた、私共は愛無き生活は砂漠の如き生活であることを、理屈よりも実生活の体験から知っており、愛の実践を欲しているのではあるまいか。これは釈迦の慈悲、孔子の仁と同じケースであるが更に徹底した愛の極致である。

聖パウロの教える愛の極致は栄枯盛衰の人類の足跡をたどれば厳然として実証される。人の道や道義は科学と力の前には無力、無益であるか。全てを支配するものは力であり、理詰めで勝ち栄えるのだろうか。

決してそうではない。「天網恢恢疎にして漏らさず」である。天の法網は広く、目が荒いようだが、悪人はこれを漏らさず捕える。天は即ち厳正であり、悪事には早晩悪報がある。また、力で臨むものは力による報いを受ける。たとえ、豪奢華麗を極めた宮殿で美衣美食にふけり、力を持って全世界に号令する権力者があったとしても、それが永続したためしはない。なるほど衣食住の豊かさも大切であり、権力は偉大であろう。また、科学も尊い。

しかし、愛にまさるもの、尊いものは絶対にない。愛は諸徳をもすべくる帯のようなものであり、愛がなければ全ては無に等しく、愛の無い行為は全て無益であるのだ。

聖パウロの教えを聞こう。「愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。不義を喜こばないで真理を喜こぶ。そして、全てを忍び、全てを信じ、全てを望み、全てを耐える。愛はいつまでも絶えることがない」と。

私共の知識も力も、全知全能の神から見ればごく一部に過ぎない。だから必ず滅びる。しかし、信仰、希望、愛は永遠に存続し、このうちもっとも大いなるものは愛である、と教えている。私はこれを真理だと思う。この手紙を読むたびに霊感を覚え、永遠不滅の光を見る思いがするのである。

それでは一体「神を愛す」とはどういうことか。これは善人になりたい、聖人君子になりたい、終局は神人一体にまで到達したい、よしんばそこまで行きつけなくとも一歩でも近づきたい、という善なる人間の願望だと私は思う。愛神とは善なる行為であり、努力、精進、修養鍛錬を為すことである。聖パウロの如き人でも「ああ我悩める人なるかな」と嘆声しているほど人は弱いものなのだ。

良い行ないをしよう、しようと心掛けながらちょっと油断しているあいだに自分でもあきれかえるほどの罪深い行ないに走る。それが人間というものなのだ。私もそうだ。

ちょっとの油断に善心は消え、直ちに悪心がはびこる。そもそも、人間は善心と悪心の二心を持つものであることを悟り、常に心掛けて善なる心を刺

激し続ければ、遂に悪しき心はかげをひそめ、私の心は全部善になる。この努力を続けること、即ち愛神であろう。西郷南州先生の信条であった「敬天愛人」の敬天とは愛神と同じであり、これを実践する境地ではあるまいか。

また「人を愛す」ということは「神を愛す」という徳目に比べると判りやすい気がする。しかし、問題はその実践である。己れに好意を寄せるものを愛することは悪人でも為す。しかし愛人の極致はバイブルの教える如く敵をも愛することである。戦国時代、かの上杉謙信は塩の欠乏に苦しむ宿敵武田信玄に塩を贈った。これはいまなお武士道の鏡として讃えられている。

が、私は真に人を愛することに徹すれば戦争の如き力の争いは必ずこの世から抹殺することができ得ると信じている。愛なき禽獣（きんじゅう）の世界を支配する法則は力のみであるが、人間社会では自他相愛をもって天法としなければならない。これは本能的欲望に身をゆだねた場合、決して到達できない境地であり、己れを愛する如く、己れの欲するところを他に施し、愛するのでなければ人間ではない。それにはまず、人をわけへだてしない人間にならなければならないのだ。

次に「土を愛す」とは何か。愛土とは人類の母体である土、母なる大地に心血を注ぎ、これを豊かにするということである。

人類はこの世に誕生して少なくとも百万年の才月を経て今日の進歩を致したのであるが、人間はもちろん、生あるものは全て土から生まれ土に還る。これは生命の続く限り、未来永劫に繰り返す。そうして神はそれぞれの民族

に自然安住の地を与えてくれた。大和民族の地が即ち日本の国土である。だから国土は民族の母体であり、民族永遠の安住の庭であり、生産の場である。それは何物にも換えがたき貴重なものであり、愛土は人間自然の国土愛の発露したものである。祖国愛というものも、この国土愛、民族守護の願望から発するものといえる。

ある場合、持てる国、持たざる国といい、その区分は石油、石炭、鉱物の如き地下資源の有無に求められる。しかし、地下資源の如きものは自ら寿命がある。しかし、土には寿命がなくその生命力を育てれば無尽蔵の資源となる。この大地を相手とし、これを健康に育てること、これが愛土である。愛土から生まれる健土、ここから初めて健康な食物が穫れこれを食してこそ健民が育つ。愛土に生きがいを持てる人間でなければ農業人たるの資格はないと私は断言してはばからない。

私は神を愛し、人を愛し、土を愛す、三愛こそ神の道、人の道と信じており、これを実践し得る人材を開発することが酪農学園に課せられた使命だ、と確信している。かかる強固な倫理観、道義を重んじる農業人の輩出することを祖国日本は待望しているのだ。

吉田松陰が松下村塾を開いて維新の大業を成し遂げた人材を世に送った如く、グルンドヴィが亡国の危機にさらされたデンマークを救わんがため、三愛主義に立脚した国民高等学校を興し、みごとその使命を果たした如く、私は酪農学園がその使命を達成することを切望する。そのためには正しき道義

松下村塾

松下村塾は、幕末に長州藩（山口県萩市）に開設された私塾である。

松下村塾の掛け軸には「知行合一」が掲げられ、明治維新で活躍した高杉普作、伊藤博文、山縣有朋らを輩出した。

黒澤酉蔵は松下村塾を酪農義塾・酪農学園のモデルの一つとした。

をもって建学の精神とする必要があった。

悪しき道義、誤れる道義に従って教育事業が成功することはない。ましてや民族永遠の基礎産業たる農業の担い手の養成機関においてなおである。古い日本が滅びたのは、日本さえよければ他はどうでもよい、という誤れる道義に民族をかりたて神国日本という虚偽の道徳律を信奉し、実践したからにほかならない。

新しい農業人が、その使命を各個の農場で達成し、日本民族永遠の繁栄の礎石となるための心構えが三愛主義である。

（酪農学園だより・第一号・一九六九年）

黒澤酉蔵の部門別業績

年　次	事　柄
＜出生から渡道＞	
1885年（明治18）	茨城県世矢村生まれ（現常陸太田市）
1900年（明治33）	東京の神田数学院・正則英語学校で苦学
1901年（明治34）	田中正造の明治天皇への直訴後、足尾鉱毒被害民救済運動に挺身
1905年（明治38）	母の死を機に渡道を決意、宇都宮牧場の牧夫見習い
1909年（明治42）	キリスト教の洗礼受け、酪農家として独立
1982年（昭和57年２月７日）	永眠
＜教育活動＞	
1933年（昭和８）	北海道酪農義塾創設
1942年（昭和17）	野幌機農学校設立
1948年（昭和23）	野幌高等酪農学校（通信教育）設立
1948年（昭和23）	北海道酪農青年研究連盟の設立を後援（現日本酪農青年研究連盟）
1949年（昭和24）	酪農学園大学部設立
1950年（昭和25）	酪農学園短期大学設立
1954年（昭和29）	北海道農業教育振興会会長
1957年（昭和32）	（財）酪農育英会設立
1958年（昭和33）	三愛女子高等学校設立
1960年（昭和35）	酪農学園大学設立

年　次	事　柄
＜産業活動＞	
1925年（大正14）	全道の酪農民を対象にした北海道製酪販売組合を創立
1926年（大正15）	産業組合中央会道支会長（現北農中央会）
1940年（昭和15）	北海道興農公社社長
1950年（昭和25）	㈱雪印乳業相談役
1960年（昭和35）	北海タイムス社長
＜政治活動＞	
1924年（大正13）	道議会議員
1942年（昭和17）	衆議院議員
1945年（昭和20）	日本協同党を結成、代表世話人
1946年（昭和21）	公職追放
1950年（昭和25）	公職追放解除
1951年（昭和26）	道知事選に立候補、落選（以後、直接的な政治活動を断つ）
＜北海道開発活動＞	
1923年（大正12）	北海道畜牛研究会を設立デンマーク農業を紹介
1924年（大正13）	第２期拓殖計画を主導（牛馬100万頭計画）
1934年（昭和９）	北海道農業革新期成会を結成
1945年（昭和20）	戦災者北海道集団疎開100万人案を建言
1954年（昭和29）	北海道開発審議会会長（８期16年）

酪農学園史の略年表

年　代	酪農学園の歩み	社会一般の動き	
1933年（昭和８） 10月１日	北海道酪農義塾の設置（札幌村苗穂）	1933年３月27日	国際連盟を脱退
1934年（昭和９） ２月11日	同校開塾 （酪農科・製酪科各１年）	1937年７月７日 1941年12月８日	日中戦争 太平洋戦争起こる
1942年（昭和17） ６月18日	興農義塾野幌機農学校の開校 （江別市西野幌） 校名変更 ・野幌機農高等学校（1948年） ・酪農学園機農高等学校（1964年） ・酪農学園大学付属高等学校（1984年）	1945年８月15日	敗戦
1949年（昭和24） ７月11日	酪農学園大学部の開学 （各種学校）	1949年11月３日	湯川秀樹日本人初のノーベル賞受賞
1950年（昭和25）	酪農学園短期大学の開学 校名変更 ・北海道文理科短期大学（1985年）	1956年12月18日	国際連合に加盟
1958年（昭和33）	酪農学園女子高等学校の開校 ・校名変更、三愛女子高等学校（1960年） とわの森三愛高等学校…共学（1988年）		
1960年（昭和35） ４月20日	酪農学園大学酪農学部の開校 酪農学科（1960年） 農業経済学科（1963年） 獣医学科（1964年） 食品科学科（1988年） 食品流通学科（1994年）	1960年６月23日 1964年10月10日 1970年３～９月 1970年 1972年９月29日	日米新安全保障条約発効 東京オリンピック開催 大阪万博 減反政策 日中国交回復
1975年（昭和50） ４月	酪農学園大学大学院・獣医学研究科の開設（修士）		
1981年（昭和56） ４月	同大学院・獣医学研究科（後期）の開設・同酪農学研究科の開設（修士）	1988年３月	青函トンネル開業
1991年（平成３）	「酪農学園大学付属高等学校」と「とわの森三愛高等学校」が統合し（新生）とわの森三愛高等学校として開校	1991年４月 1993年11月 1995年１月17日	牛肉・オレンジ輸入自由化 冷害（平成の米騒動） 阪神淡路大震災
1996年（平成８） ４月	酪農学園大学獣医学部獣医学科の開設		
		1997年４月１日	消費税スタート
1998年（平成10）	酪農学園大学環境システム学部の開設 経営環境学科（1998年） 地域環境学科（1998年） 生命環境学科（2005年） 環境マネジメント学科（2005年）	2001年９月～	日本初のBSE（牛海綿状脳症）発生
2010年（平成22） ４月	とわの森三愛高等学校の改組 （大学附属化・６コース制）		
2011年（平成23） ４月	酪農学園大学の改組 （２学群・５学類制‥コース制）	2011年３月11日 2018年９月６日 2020年３月	東日本大震災 北海道胆振東部地震 新型コロナウイルス感染症パンデミック宣言（WHO）

編集後記

建学原論テキスト企画編集担当者

建学原論は、二〇一一年度に改訂されたカリキュラムにおいて、基盤教育の中に位置づけられた自校教育「酪農学園学」の柱となる科目です。「酪農学園の創立　黒澤酉蔵と建学の精神」は、初回発行から一一年目の本篇で第十一版となります。その編集に際しては、参考文献を追加し、文献からの画像等を関連ページの、特に下段に、補足内容や背景として掲載しています。

さて、本学シラバスには、全科目の授業概要（ねらい）にＳＤＧｓの関連目標を記載することが二〇一九年度より実施されています。建学原論の授業概要を枠内に示します。三愛主義と健土健民の建学精神はＳＤＧｓの17の目標のほとんどすべてが関連します。それらの精神を原点まで遡れば、また、デンマークまで広げれば、一五〇年も前からの歴史があることになります。ＳＤＧｓの目標をどう達成するかは、それらの精神をどう実践していくか、ということになります。理解編には、それぞれの時代の人々の生き方も示されています。それらにも着目することによって、実践に向けたさまざまな気づきにつながれば幸いです。

建学原論は、“酪農学園の建学に関わる根本の理論”、建学の理念の成り立ちを取扱う科目である。創立者の学園創立までの沿革と時代を生きた理念と思想に関する学び（理解編）、農業・食料生産、生命・環境問題に関する学園の時代的ミッションについての学び（現状編）、さらに、建学の理念を根幹として活躍している卒業生からの希望に向って如何に生きてきたかについての事例を通しての学び（継承編）、これら三部から構成している。

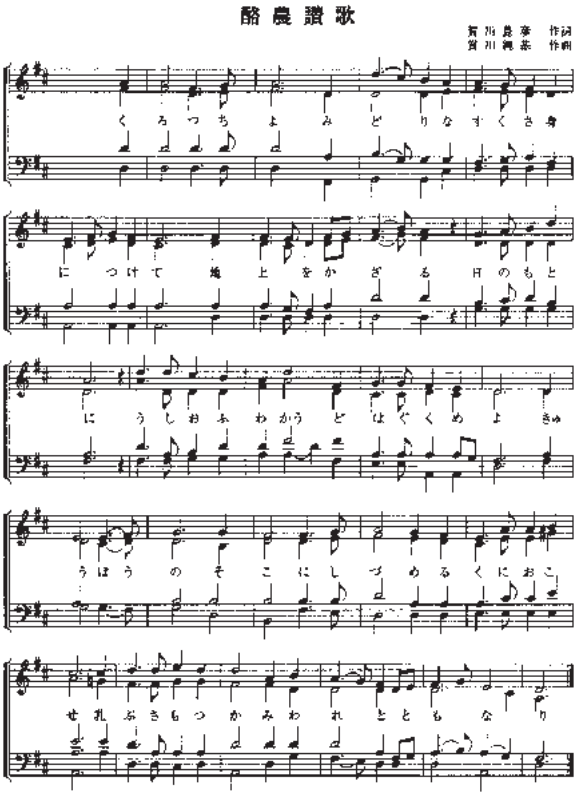
SDGs; 1, 2, 3, 4, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17

〈各目標〉

1　貧困をなくそう　　2　飢餓をゼロに　　3　すべての人に健康を福祉を　　6　安全な水とトイレを世界中に　　7　エネルギーをみんなにそしてクリーンに　　8　働きがいも経済成長も　　9　産業と技術革新の基盤をつくろう　　10　人や国の不平等をなくそう　　11　住み続けられるまちづくりを　　12　つくる責任つかう責任　　13　気候変動に具体的な対策を　　14　海の豊かさを守ろう　　15　陸の豊かさも守ろう　　16　平和と公正をすべての人に　　17　パートナーシップで目標を達成しよう

参考文献

・酪農学園『酪農学園史』一九七五年
・酪農学園『酪農学園史二』二〇〇三年
・酪農学園『酪農学園史三』二〇一三年
・酪農学園『黒澤酉蔵翁生誕一三〇年・記念　酪翁自伝』二〇一五年
・黒澤酉蔵『農業國デンマーク』河出書房、一九五二年
・黒澤酉蔵『皇道農業』育英出版、一九四四年
・黒澤酉蔵『宇都宮仙太郎』酪農学園、一九六三年
・黒澤酉蔵『酪農学園の歴史と使命』酪農学園、一九七〇年
・青山永『黒澤酉蔵』黒澤酉蔵伝刊行会、一九六一年
・原田津『空樽自鳴：宇都宮仙太郎物語』宇都宮勤、一九八一年
・原田津『酪農三徳　宇都宮仙太郎物語』雪印乳業、一九八一年
・ハロルド・W・フォード『丁抹の農村と其の教育』東京民友社、一九二四年
・内村鑑三『後世への最大遺物　デンマルク国の話』岩波文庫、一九四六年
・出納陽一『グルンドビー』酪農学園通信教育、一九四九年
・浅田英祺・崎浦誠治『乳と蜜の流るる郷―北海道デンマーク交流史―』北海道デンマーク交流史刊行会、一九八三
・佐藤貢『蚯蚓と牛乳　感謝の生涯』佐藤貢（三陽印刷）、一九八五年
・佐藤貢『―天地人の恩澤に感謝―佐藤貢の生涯』酪農学園後援会、二〇一六年
・樋浦誠『農村青年と科学』富民社、一九四八年
・仙北富志和『健土健民への招待』ストーク、二〇〇五年
・仙北富志和『牛飼いからの伝言――黒澤酉蔵の生涯』、二〇〇九年
・仙北富志和『酪農学園小史―創立者黒澤酉蔵を今に読む』二〇一三年
・村山昭二『黒澤酉蔵の思想・信仰と建学原論』、二〇一〇年
・黒澤信次郎・安宅一夫・佐藤巌・高橋節郎『酪農学園創立者たちのまぼろし』酪農学園大学エクステンションセンター、二〇〇三年
・下野新聞社『田中正造物語』随想舎、二〇一〇年
・中原准一「先人に学ぶ循環型酪農」『酪農ジャーナル臨時増刊号　循環型酪農へのアプローチ』酪農学園大学エクステンションセンター、二〇一〇年
・水樹涼子『岸辺に生う―人間・田中正造の生と死』随想社、二〇一二年
・札幌牛乳搾取業組合『札幌牛乳搾取業組合一一〇年の歩み』二〇〇五年



酪農讃歌

賀川豊彦 作詞
賀川純基 作曲

一、黒土よ　みどりなす草　身につけて
地上をかざる日のもとに
牛追う若人はぐくめよ
窮乏の底に沈める国おこせ
乳房もつ神　我とともなり

二、はらからよ　手に手をとりて　村まもり
弱きをたすけ　貧しきを
いたわるために　勇みたて
窮乏の底に沈める国おこせ
乳房もつ神　我とともなり

三、みひかりに　恵はつきず　つまずく日
倒るる時も　見捨てずに
我をはげます　神の愛
窮乏の底に沈める国おこせ
乳房もつ神　我とともなり

酪農学園の創立　黒澤酉蔵と建学の精神

二〇一一年四月一日　第一版第一刷発行
二〇一二年四月一日　第二版第一刷発行
二〇一三年四月一日　第三版第一刷発行
二〇一四年四月一日　第四版第一刷発行
二〇一五年四月一日　第五版第一刷発行
二〇一六年四月一日　第六版第一刷発行
二〇一七年四月一日　第七版第一刷発行
二〇一八年四月一日　第八版第一刷発行
二〇一九年四月一日　第九版第一刷発行
二〇二〇年四月一日　第十版第一刷発行
二〇二一年九月一日　第十一版第一刷発行

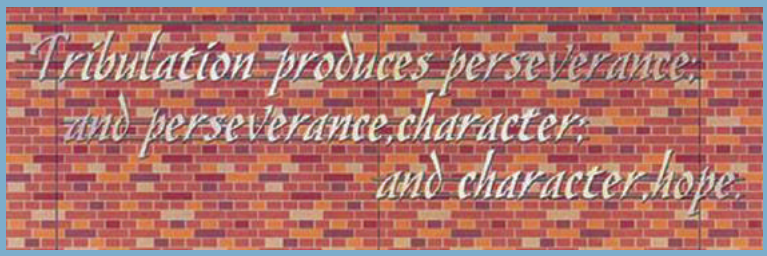
企画・編集　安宅一夫　小山久一　竹花一成　中原准一　野　英二　村山昭二　山舗直子

発行者　酪農学園大学
〒〇六九－八五〇一　北海道江別市文京台緑町五八二
電話　〇一一－三八六－一一一一㈹

印刷所　社会福祉法人　北海道リハビリー
〒〇六一－一一九五　北海道北広島市西の里五〇七番地一
電話　〇一一－三七五－二一一六㈹

氏名：

生きるを学ぶ。
学びが生きる。



苦難は忍耐を、忍耐は練達を、
練達は希望を生む。
ローマの信徒への手紙
５章３～４節

酪農学園大学は、2020年度（公財）日本高等教育評価機構による大学機関別認証評価において大学評価基準に適合していると認定されました。

2021年度建学原論（前編）